

ふじみの



No. 27

東京農大畜友会

巻頭言

学科長 渡 邊 誠 喜

「ふじみの」第二十七号の発刊に際し、一言御挨拶を申し述べる。

本誌第一号が発刊されたのは昭和三十六年で、当時、上級生が千葉県茂原分校にあり、学科研究室などもないこの世田谷キャンパスに入学した第十期生の有志の集いから、この畜友会が発足し、「ふじみの」が会誌として刊行される様になった訳である。その第一号の巻頭言に畜友会委員長高山照夫君は、本学における畜産学教育、畜産技術者は如何にあるべきか！と問いかけている。あれから二十七回を重ねて本誌が編集される訳である。畜友会の姿、形も年代と共に変貌して来ている。会員の諸君も畜友会発足頭初からの「ふじみの」をひもといてみて歴代の畜友会のあり方などを偲んでみては如何であらうか。事務局へ足を伸して！

最近の新聞報道などの記事に眼を転ずると、畜産領域に関するものが極めて多い。例えばバイオテクノロジーを駆使した牛の授精胚移植の成功例、神経芽細胞の融合によるキメラニワトリの生産、はたまた、転換迫られる牛肉輸入枠の件など、明るい情報の裏には今抱えている畜産の問題が頻見される。

この様な時こそ、諸君の様に研究室で研究勉学に精励し、課外活動に活躍した農大生の活躍が期待されるのである。畜産学徒の飛躍するに絶好の機会でもある。特別会員を含め全会員一同、一致協力して畜産学発展のため邁進されん事を祈る。

巻頭言

ふじみの発刊にあたり

畜産学科三年 塚 本 涉

本年度、畜友会委員長となりました塚本です。お蔭様で「ふじみの」の発刊も、今年で二十七号目となりました。

さて、この「ふじみの」ですが、昨年一年間の事業報告、決算報告をはじめ、畜産学科の学生による原稿など数多く記載されています。このような「ふじみの」の編集をはじめ畜友会では、多数の事業活動を行っています。

みなさんも、私達とともに楽しい学生生活を過ごしましょう。

ふじみの
目次
第 27 号

巻頭言

ふじみの発行にあたり
渡邊 誠喜 1
塚本 渉 3

御一報

「ドクターバブイと
ドクターバカ」
教授 一戸 健二 6

ミルフルの姿を追う
教授 鶴田文三郎 13
ミシガン州立大学での
一年間
講師 石岡 宏司 16

別海だより

別海町の酪農実習を
終えて
畜産学科2年 田村 典久 20

別海町酪農実習を
終えて
畜産学科2年 森 期子 21

集う学友

アメリカの空から
畜産学科4年 中山 昭洋 23

家畜人工受精師
講習会を終えて
(先輩から下級生への手紙)
畜産学科4年 塚本 富雄 26

収穫祭だより

収穫祭を終えて
畜産学科3年 塚本 渉 52
前夜祭・特別企画
畜産学科2年 李 忠憲 53
体育祭を終えて
畜産学科3年 石和田研二 54
THE KACHIKU-EN
畜産学科3年 折原健太郎 55
第95回収穫祭畜産学科統一本部決算報告書 61

畜友会だより

昭和63年度定期総会報告 62
昭和63年度畜友会役員選挙報告 63
昭和62年度畜友会決算報告 64
昭和62年度畜友会事業報告 65
学内スポーツ大会結果報告 66
昭和63年度畜友会行事予定 67
畜友会規約 68
編集後記 72

研究室だより

家畜繁殖学研究室 36
畜産物利用学研究室 39
家畜生理学研究室 42
畜産経営学研究室 43
家畜衛生学研究室 45
家畜育種学研究室 48
家畜飼育学研究室 49

自分を支えてくれた
仲間達―全てを収穫祭にかけた男
畜産学科4年 西川 二郎 28
「二度目の収穫祭を
終えて」
畜産学科3年 古谷 栄 29
佐渡島紀行
畜産学科2年 神永 憲一 30
農業実習
畜産学科1年 生方 弘子 33
思い出の
オリエンテーション
畜産学科1年 小野 郁子 34
八詩▽タンポポ
畜産学科3年 山下 俊也 35

「ドクターバブイとドクターバカ」

教授 一戸 健 司

一、出発に際して

昨年の八月五日、私達が十回目のフィリピン渡航を意図する前一週間、私の精神状態はまさに半ばバニック状態を呈していた。即ち七月末日迄に本年九月に名古屋で開催される、第十八回万国国家禽会議の「最終案内書」を作成せねばならず、それと「コンサイス鳥名辞典」の原稿作成とが重なり、私の頭は千々に乱れ、一時は渡航を中止しようか、それとも原稿を断わろうかと思ひ悩む日々が続いた。

こんな次第で、従来フィリピンへの渡航に際しては、必ず先方から依頼されるであろうと予測される講演の原稿作りや、学生達には現地での学生達との合同ゼミナールに備えて、スピーチの練習等をさせたりして来たが、今回はこの慣習を履行する余裕はさらさらなく、ただ先方とのスケジュールの打合せだけを完了して出発した。この様な無理がたたり、私はフィリピン到着後、二日間発熱で寝込む羽目となった。同行した四名の学生達は、た

だ常夏の国フィリピンの自然美を満喫して来た感があり、従来の渡航時に先輩達が経験した、「学生間の学術交流」の任を果たす為、毎日夜を徹して英語を勉強した貴重な体験がないまま帰国し、この点が返す返すも残念に思われる。

二、トロピカルナイト

イロイロ島に到着した翌日、フィリピンでも有名なリゾート地区「ボラカイ島」へのバス旅行が実施された。前述の如く、私は出発前の過労がたたって歯茎が腫れ上り、昨日から三十八・五℃（平熱は三十六℃以下）の熱に悩まされていた。昨日のウエストビサイヤ大学長への表敬訪問と、闘鶏育成農家の訪問だけは何とか果たしたものの、本日は休養と締め込み、学生達をコッキン教授らに任せしてホテルで時を過ごした。未知の旅先のそれも中級ホテル（イロイロ市では最高級との事だが）で一室、食事を採る気にもならず、ただ天井と睨めっこをしながら、今頃学生達はどのようにしているだろうか。コッキン博士がついているから大丈夫だろうが、何も起こらなければよいがと、一人で心配しながら眠りについた。

一方ボラカイでは、後から学生達から小出しに聞いた話を総合すると、夜は月明りのもと底迄青く澄んだ海で泳ぎ、次いで世界各国から集った若者達と月の光のもとでディスコに興じ、トッコ（南国特有の巨大なヤモリで

トッコ、トッコと大声で鳴く）の声を聞きながら、小さな蚊屋にくるまって寝たと言う。まさに南国気分を満喫した彼等、そして天井のみ跡を数えながらむなしく時を過ごした私、同じ南国の夜とは言え、まさに天国と地獄と言わざるを得ない。



美しい Borocay Beach

三、センドオフ プログラム（お別れパーティー）

八月十日、月曜日、私達のイロイロでの旅もいよいよ



Send Off Program で Choral Group の学生と

今日で終わり、ガラガン学長は私達の為に「お別れパーティー」を開催してくれた。パーティーには大学の首脳部に



Mr. & Mrs. Losanes 家への招待 (Iloilo)

学生の代表も加わり約五十名、最初は一同で英語の歌（ユアー、マイ、サンシャインも含まれていた。）を歌い、次いで男女六名によるフィリピンの代表的な歌と踊り、私の好きな「ダブルサヨ」を情緒豊かに歌う演劇部の男子学生、そして「チャチャ」に始まるダンス。ディスコばかりの経験しか持たない学生達には、おそらく初めての経験だと思いが、若い女子学生と踊る彼等には、緊張の中にも深い満足感がみられた。学長は祝詞の中で、「日本に帰国されたら、必ず必ず当大学のコッキン教授らと東京農業大学の職員との間に、在来鶏の改良についての協同研究が復活する様、日本学術振興会に要請して欲しい」と強調された。

夕食は、在日中のロサンニエス君の父親宅に招待され、昨日のアルマダ一家（長男ノエル、アルマダは目下東京水産大学の修士に在学し、私とは七年越しの付き合いである）の招待とともに、この国の人達の心をあげてのもてなしには、ただ感激の外はない。ただあまりにも油濃いで、消化

薬を服用し続けないとトイレの回数が増える事現実である。

四、ドクターバブイとドクターバカ

タガログ語では豚の事はバブイ、牛の事をバカと言う。同行した石川聖浩の実家は養豚業、古谷栄の実家は酪農業、そして何んとなく石川はバブイ、古谷はバカを連想させるムードを持っている。そこで私は考えた。これから二人には「ドクターバブイ」、「ドクターバカ」の称号を与えよう。そして彼等が単なるバブイ、バカに終わらぬ様、この称号を大切にされる様肝に銘じてもらいたい。これが彼等二人のフィリピンに於ける最大の収穫となるであろう。

フィリピンでは男性は実によく酒を飲むが、女性は飲まない。その為か女性のバブイは少ないが、男性は三十才にもなると殆んどと言ってよい位バブイ型となり、中にはヒポポタムスの様に巨大な体の中に首が埋まっている人がいる。

五、東シナ海に浮かぶジャイアント・フラッグ

パラワン島ではボンシ・デイ・レオン教授が何かと世話をしてくれた。パラオ学長の甥であるこの人とは、私が初めてこのパラワン農科大学を訪れた一九六七年からの知己であるが、その奇想天外なライオンを連想させる風貌とは裏腹に、極めてユーモアに富んだ愉快な人である。彼と椰子の木陰にたたずみ、学生達の泳いでいるの

六、無知ほど可愛いものはない

パラワン農科大学での宿泊は僅か一日であったが、私が何度となく訪れているため、当大学ゲストハウス担当のミセスサリンは心得たもので、私達に合った料理を御馳走してくれた。学生達も私も大きなカニ、そして果物、パンやスープを心ゆく迄堪能し、ただ美味しい美味しさを連発した。この島での西の空を真紅に染める日没は印象的であった。

大学から空港のある州都プエルトプリンセサへの途中に四人の収容所イワヒグがあり、ここでのショッピングが又何んとも乙なものである。囚人が作ったものだけに手がこんでいて値段も安く、その上放飼いされている囚人達の中に、一時的ではあるが同居していると言う緊張感もある。最初はレオン博士が同行してくれる予定であったが、何分私達には荷物も多く、総勢五名の中には石川の様に一三〇kgの体重の者も含まれているので、とても一台の車では無理だから、彼は後から荷物と一緒にホテル迄行くと言う事になった。運転手と私達とは危険でもあり、時刻も遅い事故（大学を出たのは既に四時半近くになっていた）イワヒグは通過するものと思いきや、運転手は収容所の売店前に車を停めた。既に六時に近く次第に夕闇がせまっている。売店のおばさんとは顔馴染みで、にこにこ私を迎えてくれたが、何分此処は放飼いされている囚人の真只中、時折観光客に対する恐喝

をみながら、私が退職した後にこのパラワンに土地を買って住まなにか、等と話していたが突然大声で笑い出した。石川の泳いでいる姿が、まさに「巨大な蛙がポカンと浮いている姿に似ている」と言うのである。確かにその通りである。浮力の大きい彼は、ただ何も



Palao学長、学生らとRafols HotelのDiscoにて (Puerto Princesa)

しない状態でもポカンと浮き、そしてただ漠然と水面を撫でていただけ進むのである。

又レオン教授は、かつてこの島を二度訪れた事のある農場の西脇講師の事を思い出しては、その緊張した風貌が「カラバオ（水牛）」にそっくりだと言って、バブイならぬヒポポタムスの腹を抱えて笑うのである。



Palawan National Agricultural Collegeにて
パラワン農科大学 (Aborlan)

もあると聞いているので私は気が気でない。学生達はそんな事は何処吹く風、のんびりと笑いながらショッピングを楽しみ、記念撮影に余念がない。既に暗くなったイワヒグのゲートの後にした時、私は思わずはずっと胸を撫で下ろした。

プエルトプリンセサでは幸運にも、マニラから帰校するパラオ学長に出会った。彼とは長い付き合いである。その間既に農大にも、我が家にも訪れた事があり、彼と出会った事でパラワンが日本の国内である様な錯覚にとられた。彼は時計を見ながら「今日は大学迄帰る時間がないので、プエルトプリンセサに泊る事にした。君達が望むならばラフォレスホテルのデスクに招待するが」と提案した。学生達は先刻迄の疲労等何処へやら、大喜びである。ジャスト午後十時、当市に所在する水産学部の女子学生を伴って迎えに見えた。ラフォレスホテルはファイブスターホテルである。私が初めてこの島を訪れた時、唯一の外国人が泊れるホテルとして紹介されたこのホテルの前身は、便所もシャワーも共通と言うお粗末さで、ただ泊れると言う程度のものであったが、現在の建物は実に立派である。ただ何んとなく往年の様な活気が感じられないのは、オーナーが昨年死去され息子の代になったからであろうか。

軽音楽やダンスの好きな私ではあるが、ああきらきら、がらがんやられると年齢のせいもあり、いささかへきえきの境地である。ほどほどにエンジョイしている

と、踊りに乗っていたパラオ学長、レオ教授から「ディスコ・キング」だと言って握手を求められた。

ディスコダンスには全く規定のステップが存在しない。それだけに各自各様に踊りに興じている学生達の動作を見てみると、その性格が手にとる様によく見える。テンポにはあまりこだわらず、ただひたすら自己のペースで同じステップを繰り返す者。あたりに気配りしながら、うつむき加減に激しいステップを踏む者。初めは静かに興ずるに及び乘りに乗る者。ステップは地味でひかえ自だが、何んとなし楽しい雰囲気を出している者。それぞれが各自各様の動作で、ダンスに会話に楽しい一時を過ぎた。

このパーティーには、実に白人の客も多く参加していた。パラオ学長の話しによると、台風がバラワン島に向っているのですべての空の便が欠航している。そのためこの島に足止めを食った旅行者が、ディスコにも流れて来たのだらうとの事であった。フランス人の三人組の青年は羽目はずし過ぎ、ガードマンからつまみ出される羽目となり、この時ばかりは学生達もやや緊張した様である。

七、危機一髪

八月十三日、台風の影響で本日のマニラへの便は欠航と知らされた。万一期朝この島を出発したとしても、翌十四日のマニラ発成田行の便には間に合わない。そして十五日からの帰国便は二十日迄総て満席であると知らされた。ホテルで待っていても仕方がない。そこで取り敢

えず空港迄行き、万一午後に臨時便が出る場合には必ず

ホテル迄連絡して欲しい旨呉々も頼み、ショッピングで時間を費やし、後はホテルで奇跡を待つのみ。私のマニラ到着を先頃来日したマリアーノ・マルコス大学助手アルバート・バスキュラルが、今頃ヒルトンホテルで待っていると思うと気が気でない。然しながらバラワンからマニラ迄の電話は殆ど通じないと聞かされては、もはや成行きにまかせる以外に方法がない。レオン教授は帰校し、後は私達だけ。

午後一時、奇跡が起こった。空港から電話で、臨時便が出るから至急手続をしろとの事。私達は空港へ突進した。然しながらその途中で思わぬアクシデントが起こった。何分車が小さいので、私と倉本、深津の三名は何んとか座席に座れたが、他の二名と荷物は屋根の無い荷台にと言う事になった。車が三分も走ったろうか。急にシャワーがやって来た。そして荷台の二人はずぶ濡れ、空港では荷物のチェックや着替え、全く慌ただしい内にブルトプリンセサを後にした。飛行機は台風の影響で上下動が激しく不気味である。然しながら私達は、その危険よりもこれで何んとか帰国の見通しがついた喜びで一杯であった。

八、終りに

「お前はフィリピンが好きだなあ」とよく言われる。然しながら日本から最も近く英語の練習が出来、レクリ



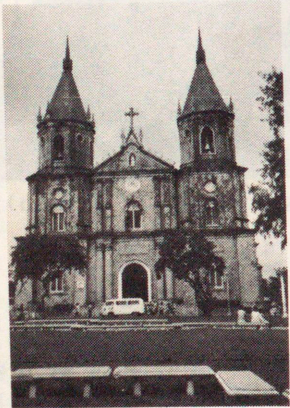
W.S.U.のSend Off Program
でGaragan 学長と

エーションの
みでなく学生
達にも学術交
流の出来る国
となると、や
はりフィリピ
ンが第一番に
挙げられるの
ではなからう

か。私もあれこれ十回足を運んだ事になる。

さて今回は、アキノ政権になって初めての渡航である。当政権は発足以来既に十八ヶ月目を経過している。私はこの十八ヶ月に何がどう変化したかを、興味を持ってムット椰子油独特の臭いの漂うマニラ空港にいでた。そして十日間学生達と話し、次の様な幾つかの変化を見出した。

1. かつては乗車する度に、必ず喧嘩越してないで安心して乗れなかった。タクシー



Molo Church にて (Iloilo)

の中に、メーターで乗れるゴルフデントクシーが生まれた事。
2. 今迄スリムな足を細いズボンでひた隠ししていたフィリピン女性が、進んでスカートをはく様になった事。

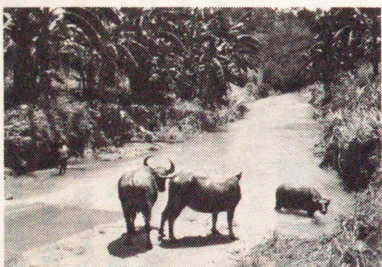
3. 目上の人との会話に、男性に対しては「サー」女性には「マム」をつけていた習慣が、次第に薄れて来た事。



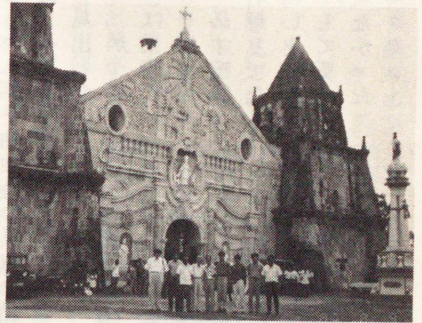
Manila 空港にて

4. 女性には特殊な階層を除き、従来喫煙、飲酒の習慣が認められなかったが、昨今一部の人々にこれらの習慣が芽生え始めて来た事。

5. 従来比較的冷遇されてきた部分に、予算が支給される様になって来た事。バラ



Carabao の水浴風景



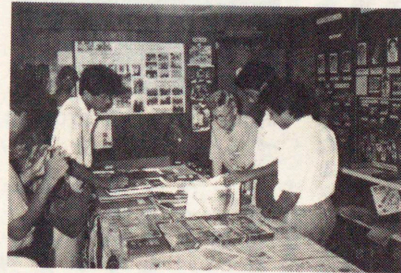
Miagao Church にて (Iloilo)

ワン農科大学には足繁く訪れたが、この一年半の発展は過去の十数年間にも優る顕著なもので、その間にアボランには立派な本館、研究棟、ゲストハウスが建ち、プエルトプリンセサには、永年の懸案であった水産学部の校舎が新築された。

6・例の若王子氏の事

件の後遺症か、日本人観光客の姿は激減したが、彼等の日本指向はこれとは裏腹に高まって来ている様に思われた。

私のフィリピン行きは今後何回続くだろうか。過去に同行した教職員、学生は既に五十名を越えている。先に



West Visayas State Universityの図書館にて

渡航した農場の伊藤助手が「フィリピンは、学生が初めて渡航を体験するには最も適している国だと思います」と言い、又幾度か講演を実施した桑山副手が、「フィリピンで大勢の職員や学生を前にして英語でスピーチをしたお陰で、学会の発表でもあがらなくなりました」と述べて居り、これらの言葉が私を元気づけて呉れる。



広々とした Texas 種の飼育場

ミルフルの姿を追う

東農大教授 嶋田文三郎

はじめに

私の机の上に封筒が置いてあった。開けてみると、「ふじみの」原稿依頼の件、とあり、第九五回収穫祭にて、畜産物利用学教室で配布した、ミルフルが話題(学生の間で)に上りましたので、ミルフルについて一筆お願いします。

とある。本学に着任した三年前私は、パイオの神秘「乳清」の秘密(講談社)

という本を書き、発刊した。この乳清からつくり、市販されているのが、ミルフル(中外製薬KK製)である。このミルフルは、特にうら若き女性に愛飲されているという市場調査の結果があるので、それも含めて一筆啓上することにした。

チーズの妹・乳清をみる

牛乳の利用の中で、昔から造られていたものはバターとチーズであることはご存知の通りで、そのチーズの造り方は、

牛乳を殺菌し、冷却後乳酸発酵してこれに凝乳酵素

キモンを加えて凝固し、その凝固物はチーズの素にするが、残った液体は乳清である。

凝固物には牛乳のカゼインと脂肪成分が主に移行するが、乳清にはその他の乳成分の殆どが残る。

すなわち、キモンの作用で牛乳から生まれたチーズの素を兄とすれば、乳清はチーズの妹である。

この乳清を正確にいうとチーズ乳清、チーズホエー、或いはレンネットホエーという。

何分にも、昔からチーズを目的にした製造工程の副産物として乳清が自然にできるものであるため、作業の主力はチーズの方向になる。したがって、自然に生れた乳清は放置される。その放置の過程でさらに乳酸発酵が進み、その風味は必ずしも好ましいものでなくなる。それで、この乳清の中に牛乳の貴重な栄養成分が含まれていることはよく知られ乍らも、つい捨てられたという歴史が主になってきた。

しかし、決してチーズの妹乳清の総てが捨てられたという歴史だけではない。調査によると、古い時代ドイツ、スイス、オーストリアの山岳地帯のチーズ工場の近くに、乳清療養所が建てられ、新鮮な乳清を万能の水薬として利用し健康増進に活用されていた。

乳清の水薬としての卓効を提唱したのは、古代ギリシヤの偉大な医師で、コス山の医学学校の創始者でもあるヒポクラテスであるが、それを受けてさらに普及したが、ローマ皇帝マルクス・アウレリアスの侍医となった

小アジア出身のガレウスである。一七〇〇年代はチソー、現代はアネミューラーという医学者達も、乳清は健康の素であり、健康回復の水薬であることを近代医学的に確認し、その普及に尽力している。乳清療法が山の中の療養ホテルで現在なお行われているのもそのためである。

このような歴史は、日本語に温泉療法という言葉があるように、ドイツ語に MÜLKEN KUR (乳清療法) という言葉があり、そして乳清を BIOLOGISCHEN HEILMITTEL (生物から生まれた薬) と呼んでいることから想像できる。

その昔の乳清療養所は肥満した人々、肝臓障害の人々、或いはほっそり美しくなりたい貴婦人方によって何処も満室であったと記録されている。時にはその療養所は、高貴な方々の社交場と化したこともあったらしい。特に、若草萌ゆる早春の草を餌にして生産される牛乳の乳清に大変人気が集り、その頃の療養所は満々席であったといわれている。

減食療法の宝が乳清にある

望むものを総て手に入れることのできた不世出の英雄ジンギスハンも、老いることをどうすることも出来ず、それを道教の老権威長春真人を招いて尋ねた。長春真人遠より来たる 長生の薬ありや 衛生の道あり 長生の薬なきや まことに長生の薬なきや 衛生の道あり 長生の薬なし

分析された乳清の現代像

科学分析結果の乳清の主な成分をみると、

全固形分	五・五%	乳糖	一・〇%
タン白質	〇・七%	Ca	九二mg%
乳糖	四・一%	P	七五mg%
脂質	〇・一%	K	一三七mg%

この乳清タン白質の栄養学的生物価は一〇四で近代科学による理想タン白質一〇〇より優れている。かつ、不良生物価の植物タン白質の栄養増強能力も大変優れ、将にウルトラ高品質タン白質である。このことは発展途上国の少年や病人の実際栄養試験でも実証されている。

さらに、乳清タン白質の主成分はβ-ラクトグロブリンとα-ラクトアルブミンであるが、その他、ラクトフェリン、リゾチム、免疫グロブリン、トリプシンインヒビター、ラクトパーオキシダーゼなどが含まれている。昔から乳の天然殺菌作用は認められていたが、実はこれが乳の感染防御作用で、ラクトフェリンなどがこの作用に関与していることが最近わかってきた。

すなわち、乳清タン白質は生物価が高いと同時に、有害菌の活性阻害、異種物質の吸収阻止、罹病の防御などの役割も果たしている。換言すれば、乳清タン白質は腸内のガードマンであり、クリーナーである。このガードマン、クリーナーとしての作用は乳清内の乳糖や乳酸にもあり、これらはさらに、乳清タン白質と

という対話であったという。すなわち、何時までも生きる長生の薬はなく、古今東西何れのヒトも長生の薬を望んだが皆んな死んでいった。勿論ジンギスハンも死んだ。しかし、衛生の道により少し長く生きることができた。乳清もまたその衛生の道として用いられたのである。

古くは、水薬として乳清は体内の洗浄、利尿、解毒、腸の機能促進、体力回復、便秘、肥満症などに効ありと考えられていた。

最近の臨床実験によると、肥満、高血圧、糖尿病、慢性便秘の治療に乳清は大変有用であると確認されている。さらに具体的にみると、血清中のコレステロール、脂肪、尿酸の濃度を下げることが、乳清飲用によって出来ることが証明された。

しかし、これらの臨床実験結果は病に倒れた後、医師の監視のもとで行われた療養生活の成果であって、その基本は減食療法である。

減食療法で大切なことは絶対にタン白質、特に良質タン白質を減食しないことである。一日七〇gのタン白質を必ず摂ることと一般にいわれているが、減食の場合も、六〇gの良質のタン白質は少なくとも摂ることにしている。それを摂らないとやがて体タン白質や体内酵素も減少し、ほっそり美しくといって減食した乙女のように「るいそう」で死に至ることがある。乳清タン白質は大変良質であるので、それを主食にして減食する乳清療法はその点大変安心であるといえる。

協力してCaやPの吸収促進にも関与している。すなわち、何処からみても乳清は健康と美容の天然の水薬であると近代科学も証明している。

しかし、問題が一つある。それは乳糖で、これの少量摂取は薬になるが、赤チャンでない大人の腸内ラクターゼ活性は低下するので、少し多く摂ると消化しきれず乳糖不耐症といわれる下痢症状を起こす。特に日本人の大人はラクターゼ活性が一般に低いので、一度に三〇〇mlの牛乳、乳清を飲むと約一割の大人は下痢する傾向にある。これが唯一の注意点である。

おわりにミルフルを

現代人の飲料に求めるニーズは「おいしくて、渴きをいやすもの」に加えて、「健康と美容にプラスするもの」となりつつある。このニーズに応えるべく、哺乳動物の最も身近な自然物乳清をもとにして開発した飲みものがミルフルである。しかし、前述の大人の乳糖不耐症の原因になる乳糖は部分加水分解してある。したがってミルフルで下痢することは殆どないといえる。

調査によると、現代は飽食、過食の時代であるが、一方レジャー化と共に偏食時代でもある。この時にあって、ミルフルは牛乳と共に、それらの常飲は無意識のうちに行なう栄養にバランスとしての役割は大きい。スポーツドリンクと一寸違ったおすすめ品である。心して食生活をエンジョイしたい。

ミシガン州立大学での一年

畜産経営学研究室

講師 石 岡 宏 司

昭和六十一年九月から六十二年八月末日まで、米国ミシガン州立大学で勉強する機会を与えられ、州都ランシングの隣町イーストランシングで約一年間生活してきました。顧みますと今から十五年程前、私が学生生活を終えて農大に勤務した年に畜産学科から初めて天野先生が米国へ留学されています。その時は、全く見ず知らずの国へ一年間も留学するなんて、本当に何て凄いな事を人がいるもんだと思つたことを記憶しています。しかし、自分もまた同じ国へ行くことになるとは夢にも思いませんでした。

一、ミシガン州について

ミシガン州がアメリカ合衆国の一員になったのは一八三七年で、昨年はちょうど百五十周年記念の年である。いろいろな記念行事がおこなわれたり、記念品が売出されました。ここは、アメリカの北中部五大湖諸州農業地域

二、ミシガン州立大学(MSU)について

ミシガン州立大学(MSU)は、一八五五年に合衆国で最初の Land grant college として設立され、当初はMAC、更にMSCと名称を変更して今日のMSUとなっています。農大とは二十年前から姉妹校の関係にあり、毎年三名の留学生が派遣されています。職員の交流も私で七人目だそうです。

大学のキャンパスは、二千五百五十三haあり、東京都の八王子市と同じ位の広さだそうです。この中に百三十以上の学部・大学院があり、学生数は、公称四万人、職員五千人と言われています。九月の新学期には五万人以上の学生がいるそうですが、これが学年末の六月になると三万人位に減ってしまうそうです。これは、日本の大学の様に卒業式が年一回ではなく、MSUは四学期制になっていて、秋・冬・春の学期終了毎に卒業に必要な単位を取得した学生が卒業する事、毎学期毎におこなわれる試験で成績が不良な学生は振り落とされて、退学・転学していくためだそうです。因みに、学部学生の単位修得条件は一年生四十単位まで、二年生四十単位以上八十二単位まで、三年生八十五単位以上百二十九単位まで、四年生百三十単位以上(最低でも百八十単位が必要)となっています。授業科目は、各学期毎に終了しま

に属して、カナダとも国境を接しています。人口は約九百万人(全米第八位)、面積約十五万km²です。人口密度は約六十人/km²となります。因みに、日本は面積約三十七万km²、人口約一億二千万人ですから人口密度は約三百人/km²です。ミシガン州で一番の大都会といえますと自動車産業でお馴染みのデトロイト(人口約二百二十万人)で、次いでフォード元大統領の出身地グラッドラップですが、州都のランシングは人口約十三万人に過ぎず、ミシガン州立大学のあるイーストランシングは約五万人の人口です。緯度的には札幌市と同じ位の所に位置していますが、内陸地帯なので冬は寒さの大変厳しい所です。幸い昨年の冬は、五十年振りとも七十年振りとも言われた暖冬で一月の中旬に一度だけ氷点下二十度近くまで下がりましたが、雪が降っても一週間程で溶けてしまい、とうとう根雪にはならずじまいでした。先住者から本格的な冬になる前に防寒具を用意したほうが良いと言われていろいろな物を買ったのですが、一度も使わずに終わった物もありました。普通の冬は、寒くて十五分以上歩いていられないそうです。地形はほぼ平坦で、スキーはクロスカントリーが中心です。ダウンヒルスキーは人工スキー場という事になります。去年は開店休業状態でした。また、氷河期の傷跡として州内には湖が二万カ所もあるそうです。

すので、農大の様に同一科目の授業が週一回一年間とか半年続くのではなく、週に三回から四回おこなわれます。授業時間も朝の七時、八時から夜の九時、十時までやられています。最近の学生は、授業料が非常に高くて修学年限が長く、勉強がハードな割には卒業後の収入がそれ程恵まれていない医学部を敬遠する傾向にあり、ビジネススクール系に人気が集中しています。ミシガン州立大学でも昨年、学生登録数の一番多かったのはビジネススクールで六千名以上でした。因みに、私がいたアニマルサイエンスは二百名強でした。

キャンパス内の施設としては、各学部・大学院の建物公邸、大学本部、農場、牧場、ゴルフ場が二カ所、約八万人収容可能なアメリカンフットボールスタジアム、同室内・外練習場、室内・外プール、アイスアリーナ、体育館、ホテル、美術館、博物館、劇場、プラネタリウム、発電所、野球場、陸上競技場、テニスコート、植物園、図書館、消防署、警察署、学部学生寮、大学院家族持学生専用寮、研究者専用寮等があります。また、日本的な大学のイメージを求める事は出来ません。また、農大でいうと常盤松会館の様なユニオンがあります。この建物の中には生協と同じ様な売店、カフェテリア、郵便局、銀行のキャッシングマシン、理髪店、ボーリング場、

ビリヤードルーム、女子学生専用のロビー、映画を上映できる施設をもつ部屋があったり、結婚式まであげる事ができる学生に対する福利厚生のための施設です。前述しました様に、これらの施設・建物が広いキャンパスの中に点在しているわけですから、徒歩で学内を歩くとすぐ三十分位はかかってしまいますので、学内の移動でも車無しでは堪りません。しかし、これ程広いキャンパスでも学生の車は乗り入れ禁止になっていまして、学生は大学が運営している路線バスでキャンパス内を移動しています。

今、アメリカで一番人気のあるスポーツは野球よりもアメリカンフットボールだろうと言われています。MSUは、今年の一月一日に四大ボールの一つのローズボールに二十二年振りに出場し、南加州大を二十対十七で破りましたが、新学期が始まる九月にシーズン開幕です。ホームゲームのある土曜日は、大勢の卒業生が前日から車で駆付けて来てキャンパスのいたる所が車だらけになり、試合当日は小型飛行機が飛回ったりで大騒ぎです。MSUのスタジアムの名前はスパルタンスタジアムといいますが、ここでゲームがおこなわれるのは年間たったの十二試合、そのための維持修理費が年百万ドルかかるといわれてました。しかし、一〜二試合の売上で元を取る様です。

用したのに円高のせいもあるのでしょうが、全く日本は航空運賃が高いですね。

アメリカを旅行していて日本との違い、戸惑いをおぼえるのは時差の問題です。本土だけでも四つの時間帯があり、ハワイも含めると六時間も時差があります。よく大統領選挙の時に、既に大勢が判明しているのにまだ投票が終了していない地域があるという事がおこります。時差の問題でもうひとつ問題を複雑にしているのは、夏時間と冬時間がある事です。daylight savingといいますが、四月の最後の日曜日から十月の最後の日曜日までが夏時間になっています。冬時間になると時計を一時戻します。夏時間で朝七時だったのが六時になります。これで朝の活動を一時遅くする事ができます。暗いうちから起きださなくても良い事になり、ミシガンのような北の地域では大変助かります。しかし、州によってはこれを採用していない所もあります。大陸を南北に移動して同じ時間帯にいるはずなのに違っていたり、逆に東西にタイムゾーン間を移動したのに時間がずれていなかったりと車で旅行する時は時間の管理が複雑で混乱してしまいます。

三、アメリカ国内旅行

滞米中に、インディアナ州フォートウエインでミシガン、オハイオ、インディアナ三州が共催した家禽学会、コロラド州デンバー郊外の養鶏場、ジョージア州アトランタの世界養鶏展、ジョージア大学の農業改良普及機関、ルイジアナ州ニューオーリンズ郊外の全農グレイン株式会社、オハイオ州コロンバスのオハイオ州立大学でおこなわれたオハイオ家禽学会、カナダ国オンタリオ州ロンドンでのカナダ養鶏展、カリフォルニア州ロス・アンジェルス郊外の養鶏場その他を訪問しましたが、交通機関としては飛行機か車を利用しました。飛行機の旅は、運賃が完全自由化されているために、航空券の値段は購入時期、旅行社によって全く違い、早目に予約した方が安く、当日購入が一番高い（値引がなく定価販売）ものになります。また、イーストランシングの様な田舎町の旅行社は比較的競争が少ないために都会の旅行社と比べると高く、私はツールフリーの電話を利用してロス・アンジェルスから購入していました。したがって極端に言いますと、同じ飛行機に乗っている乗客全員の運賃が違う事になります。余談になりますが、アメリカへ行く時に日本で購入した航空券は、帰国時にアメリカで買ったのと比べると三倍もしました。同じ航空会社を利

別海町だより

別海町の酪農実習を終えて

田村典久

今年の夏、たった一ヶ月間でしたが思い出深き別海町の酪農実習となりました。

まずは、別海町の酪農実習を行うにあたって別海町へ行くまでの距離が大変遠いと身にしみて感じました。

東京から釧路まで飛行機ですが釧路からの汽車には、まいりました。釧路から別海町まで百キロメートルくらいですが時間にして五・六時間かかったとおもいます。気持ちもあとのくらいかなと思う気持ちがありますので、遠く感じたのかもしれない。

農家先に着いたのは、夕方六時ころでした。

ここで農家の家族の方の紹介をしておきます。主人の小島さん、奥さん、おじいさん、おばあさん、奥さんの兄さんのおじいさん、小島さんのお子さんの少年（いつも少年と呼んでいた。）だいすけ君、まなみちゃんの八人家族でした。この農家は、赤字農家の跡地を買い取った農家です。この土地に住んでから一年たったところだ

す。その前は、小島さんの本家に家族全員（八人とも住んでいました。）いわゆる分家です。したがってまだ設備的には充実していません。そんな所で私は、農家実習をしたのでした。

周りの実習生と違い私は、コンクリートねりや屋根はりなどの実習が多かったです。搾乳は、もちろん毎日行いました。けれども話しによると他の農家の実習生は、かなり重い牧草のたばの積みおろしをしていたと聞きました。

話ばかりですがこれで私も農家実習を三回終えていますが、実際に残ったものがあるか？特に技術面において、おそらくあまりない。でも私は、また実習してみたい。それは、農家実習を行った人にしか分からないことだと思えますが、農家実習を通じて、人のふれ合い暖かさを感じるからです。たった一ヶ月間、一緒にいただけなのに、一生のつき合いとして私は、大事にしたい知人と考えています。

苦勞を忘れてしまいう現代っ子の私ですが、あの苦しみを身にしみてもう一度学生のうちに感じてみたいです。まだまだ働くことの大変さを知るために。

別海町酪農実習を終えて

畜産学科二年 森 期子

北海道で迎える最初の朝は札幌発釧路行の夜行列車の中ででした。八月八日に♪上野発の夜行列車に乗り来年三月で姿を消してしまいう青函連絡船で津軽海峡を渡った私はやっと北海道に上陸!!しかしそっからの遠かったこと遠かったこと。結局私が一ヶ月間お世話になった神戸家に到着したのは八月十日の午前九時頃でした。

神戸家は御夫婦と息子さんの三人で八百数十頭ほどの肉牛を飼っているおうちでした。

列車の中だったので二晩ほとんど寝ていない私でした。が食事をすまずと早速着がえて working! ーやっぱ世間は甘くないなあ。私の他に実習生として大学三年の三佳ちゃんと私の帰る一週間程前に修二君（二十三才）も来たりして珍しく実習生の多い家でにぎやかでよかったです。私の主な仕事は朝晩の飼付、大きな牛たちにはおじいさんやお兄さんがトラックで飼付してゆくのですが仔牛たちには一頭ずつミルクと配合飼料と乾草を私と三佳ちゃんとおばさんでやっていきます。三

時間くらいかかります。他に犬も猫もそれぞれ二十四つつはいたのでその世話もありました。また昼の仕事として市場に牛を売りに行く手伝い、牛舎や敷地内の清掃、牛舎間の牛の移動、放牧地の柵の修理、獣医の助手などでした。そして女の子ですからやはり住宅内のそうじ、食事の用意や後片付けの手伝い、作業服の洗濯などもしました。

毎朝四時半から仕事なんて初めはゾツとしたけれど慣れると自然に目が覚めました。一日中長ぐつで歩き回っているのが初めの一週間くらいは足がだるくって仕方がなかったし、足の裏は全面かかと!のように硬くなっちゃった。

無我夢中の一ヶ月間、はっきり言って甘くはなかったけれど、仔牛達の顔が一頭一頭わかるようになってきた。一ヶ月後、まだ帰りたくないなあーって気がしてた。

帰る前日、私は特別に獣医さんの往診に付き添って行くことができました。ほんとはお兄さんが摩周湖に連れて行って下さるのだったのですが、それよりも私は他の牧場もみてみたいと言ったので「本当に変わった子だ。」と言われちゃったけど快くOKして下さいました。

獣医さんの用意してくれた白衣と帽子を身につけた私は、幼い頃から憧れていた獣医になれたような気がしてそれだけでとってもHAPPYでした。四戸の酪農家を往診。北海道の乳牛は富士で見た牛よりずっと大きくて少しびっくりしました。ちょうど人工授精師さんと

いっしょになった牧場もあったので人工受精も見ることができました。獣医さんに牛の病気のことはじめ、その他の色々なことをわかり易く説明してもらいほんと勉強になったし、その後で連れていってもらった霧多布岬も忘れられない思い出です。

九月九日。いつもの夜明け、でも最後の朝ー。

目覚し時計より十五分早く起きた。一ヶ月前ならもう辺りは明るかったのに今頃はまだ暗い。修二君も三佳ちゃんもまだ起きていないので静かに階段を下りた。つなぎを着て長靴をはいて軍手をする。一ヶ月間の私の制服、でも今日で卒業だ。家中の誰よりも早く外に出た。空気が冷たい。「東京はまだ暑いんだろなあつ」と人ごとのように思った。よく晴れた日にお兄さんと三佳ちゃんと三人でサイロに登ったこと。あいにくの雨だった実習生の交流会。懸命に看病していた牛が死んじやったこと。仔犬がたくさん生まれたこと。そんなことが次から次に頭に浮んできた。

朝の飼付けで百頭余りの仔牛一頭一頭にお別れを言った私は、家族に見送られ、おぼさんの運転する車の窓から一ヶ月間の我が家にさよならしました。

「期ちゃん、東京帰っても元気でがんばんなさい。又いつでもいらっしゃい。別海のおぼさんのこと忘れるじゃないよ。」そういっておぼさんは厚床駅のホームで小雨の降る中、カサもささずに、私の乗った汽車が見えなくなるまで、手を振ってくれていました。私も一生懸命

命振っていました。さようなら北海道、ありがとう皆さん、また来るからねって。

集う学友

アメリカの空から

畜産学科四年 中山 昭洋

「おっ」と、私はおもわず声を上げようとした。サンフランシスコ発東京行きJAL 103便の窓から、眼下に日本列島が見えたからだ。

私は、心の底から日本へ帰って来たのだと思った。そして眼下に広がる日本の大地を、見おろしながらこの一年間の出来事を、走馬燈のように想い出していた。

私は、昭和六十二年から一年間、アメリカへ農業実習するため旅立ったのである。私にとって、アメリカは憧れの大陸であり、いつか、一度は行ってみたいと思っていたのである。それが派米農業実習という形で実現したのである。

胸いっばいの期待感とそれ以上の不安感を抱きながらアメリカへの第一歩を、早春のサンフランシスコに踏み出したのである。時差ほけの頭が治る間もなく、私はバスのチケットを渡され、実習地であるウイスコンシン州ウォータータウンに着いたのは、バスに乗り続けて三日

目の夕方であった。私は、これからお世話になる農家の方との待ち合せの場所である、マクドナルドの前で待っていた。待ちながら、最初にあったときに何と言おうかと思いつながら、英会話の本を読んでいた。すると二十分程して、一台のトラックが止まって女の人が私を手招きする。私は、あっ、この人だと思ったが、まともに挨拶する間もなく、相手の名前を確認することもなく私は車に乗せられ、車は夕暮れせまる一本道を走り出していた。私は車の中で、非常に早口でしゃべるこの女の人の「YES」としか言えず、本当にこの人が私のお世話になる方なのかと考えていたが、良く考えてみるとこのアメリカの田舎町で、ボストンバックを抱えている日本人が居るはずもなく、間違えるはずはなかったのです。そして、この日から私のアメリカでの実習生活が始まったのである。

私が実習することになった酪農家は、耕地面積四〇〇ha、搾乳牛一三〇頭、肥育牛一〇〇頭であり、家族は私を迎えに来てくれた女の人が、ここの奥さん Danna (四十九才) ボス Edward (五十五才) 長男 Peter (二十七才) 次男 Jim (二十三才) 長女 Ann (二十九才) 次女 Kathleen (二十五才) そして、おぼあちゃん Loreta (八十九才) の七人家族である。そして私は、八十九才の少しほけかけた、でも明るいおぼあちゃんといっしょに住むことになり、食事その他は家族といっしょにすることになったのである。

一日の仕事は、朝四時半に起きて五時から搾乳、朝食

の後牛舎の掃除、昼からは飼料の配合そして夕方四時から搾乳、夜八時頃に仕事が終わるという日課である。それと同時に季節により畑での作業が加わる。四月には雪も溶け若葉の季節となる。播種の準備が必要になるが、この土地では石が多いため石拾いから始めなければならぬ。だが、なにしろ広い、広い土地である。この石拾いも、その後の耕起、播種、そして秋の収穫なども、それぞれ一ヶ月もかかる作業である。

それから、月日の過ぎるのは早く最初の三ヶ月は、風のように過ぎていった。気がついてみると、荒れていた畑は一面緑の牧草地に変わっていた。そして五十ドルで購入したワークシューズはボロボロになり、手のひらの皮も厚くなっていた。ここに来て一番困ったのは、言葉より食事であった。食事が困ったというのは、なにしろ毎日、毎食、パンである。米の飯を食べつけた日本人の私にとりましては、全然パンでは腹にたまず、しかも量が少ないときている。さらに毎日ハードな労働のため私は毎日 *I'm hungry!* が口ぐせになり、私は *hungry boy* と呼ばれるようになったのである。が何も、私だけが違った食事をしてるわけではなく、アメリカ人の食生活は日本人が考えるより、質素であると思うのです。私は、家族の中でも次男の *Jim* と一番仲良くなつた。年齢も近いことがあり、仕事が終わると、町へ出かけデイスコや酒飲みに出かけるのですが、帰ってくるのが、いつも二時、三時になりほとんど徹夜になるのです。

の一部であると思うのです。娯楽の少ない田舎町で唯一の楽しみでないかと思えるのです。そして彼等は、祭日や誕生日などをとても大切にします。その日には、必ず家族全員が集りパーティーを行ないます。そしてこの場で家族の絆を確認するのです。

そして季節は、酪農家にとって一番忙がしい夏を迎えました。忙がしい日々の中で「あっ」という間に短い夏が過ぎていきました。そして長い、長い冬が始まるのです。九月の終わりにはすでに寒く、十二月には最低気温マイナス三十度近くまでなります。雪はあまり積らないのだが、夏には見わたすかぎり緑一色の大地だったものが一変して銀世界に変わる。吹きつける風は、肌を切るような冷たさである。仕事は、夏場に比べ楽にはなかったのだが、今度はその分寒さとの闘いとなったのである。

冬の最大の行事は、やはりクリスマスである。日本の新年と同じ感覚のような気がする。クリスマスが近づくと、家の周囲に色とりどりの電球を飾り、家の中には大きなクリスマスツリーが置かれる。

クリスマス当日は、家族全員が集りプレゼントの交換を行なう。その後、真夜中の教会へ向う。誰も彼もおだやかな、笑みを浮かべている。私は、このクリスマスの夜、私の部屋の窓にぶつかる粉雪を見ながら、これほど静寂なクリスマスの夜を迎えたことはないと思った。本当の意味のクリスマスというものが、わかったような気がした。

それから年が明け、春の気配を感じ始めた頃、私は、

次の日が辛くはありましたが、お互い眠い、眠いと言いながら若さと、パワーだけが勝負であったのです。

それに対して、このボスは非常に厳しい人なので。私にだけでなく、息子達にも厳しいようでありました。特に仕事面で厳しく怒るときは、顔面真赤にして、まさに鬼の様な顔で怒るのです。その迫力と云ったら、すさまじいものであります。ある日、私は乳房炎をだしてしまったのです。するとすぐにボスに呼ばれて、「どうしてなんだ」と理由をきかれた。私はおもわず言葉がうまく出てこないせいもあって、*I'm sorry* と言ってしまった。するとボスは、*You don't say I'm sorry* と強い語調で言い、「おまえは、わざと乳房炎を出したのか、そうじゃないだろう、そうじゃないなら、謝まる必要はいらぬ。次から気をつける」と、びしやりと言われた。それから私は、*I'm sorry* という言葉は良く考えてから使うようになったのです。

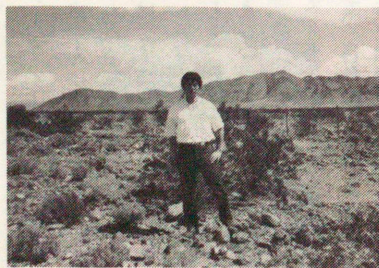
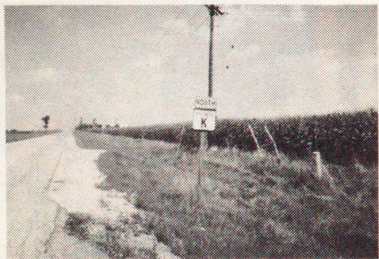
アメリカ人と日本人の最も違う点は、やはり自己主張をはっきり言うところではないかと思うのです。彼らは、自分は、こうなのだということを明確に話し、だから、おまえはどう考えるかと尋ねてきます。それにこちらから言わなければ何もしてくれませんが、こちらが言い出せばとても親切に教えてくれます。ここがアメリカ人の良いところでないかと思えます。

また、週末になると必ず家族全員で教会に出かけ、静寂な教会の中で祈ります。これは真に彼等にとって生活

この農場、この家族の元から去らねばならぬ日が来た。

思えば、長いようで短い一年間であった。今では自分が日本人であることを忘れて生活していた。ふと鏡を見た。それに映った自分の顔を見て、あっ私は日本人なんだと気づくようになっていた。と同時に、自分は日本人なんだと強く感じた一年でもあった。次男の *Jim* に抱く感情は、日本人の友人に抱く感情とまったく同じものであった。

農場を出る朝、家族全員に抱きしめられた。町のバス停まで、ここに来た時と同じように奥さんに車で送ってもらい私は、バスに乗込んだ。車窓から遠ざかる奥さんの姿とこの町の風景を見ながら、私は目頭に熱いものを感じていた。バスが教会の角を曲った時、その教会の屋根の向うに、広くて、高い、アメリカの青空がどこまでも続いていた。



家畜人工授精師講習会を終えて

(先輩から下級生への手紙)

畜産学科四年 塚本富雄

今年の家畜人工授精師講習会は、牛部門は富士農場にて、前半、後半各三十名に分かれ、又、豚部門は厚木農場にて、約三十名の参加により行なわれました。

「参加してみなさい。」

夏から秋にかけての期間、一〜三学年までの方々は、我々がしてきたと同様、おそらく、残り少なくなつた夏休みを、あたかも、惜しむ様に楽しんでいたのでないでしょうか。ところが、四年生ともなると、その皺寄せ、とても云うべきでしょうか、卒業までの最後の難題である卒業論文や、就職活動に追われる立場になるのです。

そんな、あたかも人生の中で最も忙しいと思われるさ中に行なわれるこの講習会、私は、一人の先輩として君に云おう。

「敢えて参加してみなさい。」

と。

何故、私がそんな事を言うのか。いや、講習会に参加した先輩ならおそらく、同じ事を君に云うに違いないと私は確信しています。しかし、おそらく君はまだ、納得

がいかないのではないのでしょうか。

私は、テレビ中継されるマラソンが好きでよく観ます。(私個人としては、諸外国でさかんに行なわれている市民マラソンが好きなのですが、それはさておき)あのマラソン、四十数キロメートルも走るわけですが、一番でゴールする選手は、本当に立派であると思います。が、しかし、同時に私は、二番、三番、四番……そして、最後にゴールする選手も同じ位、立派であるように思えるのです。

有力候補といわれる選手は、あたかも、追われる獣のようなプレッシャーを感じながらスタートをすることでしょう。

又、その候補外の選手にとつて、自分が、自分より速い選手らと一緒に走らなければならない恐怖があることでしょう。

話をもとに戻して、つまり、私は君に勇気を持って、

「参加」

してもらいたいです。とりあえず、なにはさておき、参加してみなさい。君は、参加することによって、自分が何をできることができるのかという事を考える前に参加してみなければいけないのです。そんなに、大人になつてはいけないと思うのです。

参加してみ、それぞれ各自の価値をみつけ、それが得られるならば、それでよいのではないのでしょうか。

「challenge」は「参加する」であると信じます。

「発見してみなさい。」

君は、自然に励まされたことがありますか。大地や、

みて下さい。

「触ってみなさい。」

とりあえず、手で触ってみて下さい。机の上の勉強も大切ですが、いすれ忘れてしまふでしょう。しかし、手で触つたもの、実験器具、牛や豚の子宮等の生殖器は、おそらく、絶対に忘れないことでしょう。恐れずに、自分の手で触ってみて下さい。

随分、言いたい事を言ってきましたが、君も、以上の三つの事、やってみてはいかがでしょう。

最後になりましたが、講習会に於いて、大変お世話になりました。門司先生、吉田先生、天野先生、鈴木先生、名倉先輩、農場の方々他、誠にありがとうございました。

山や、動物に励まされたことがありますか。

富士農場で行なわれた牛部門の講習会でのことです。講習会の日程は、非常にハードなもので、そんな日程を半分もこなしたところには、やはり、肉体的、精神的にも疲労してくるわけです。ところが、そんな時、私は、生まれて初めて不思議な体験をしたのです。

ある朝、私は今日一日のハードスケジュールをぼんやり考えながら、何心無く宿舎の窓を開けてみたのです。すると、眼前に広がる草原や、限りなく雄大な富士山、その上にゆつたりと流れる雲までもが、私を励ますのです。

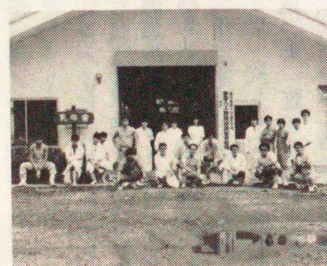
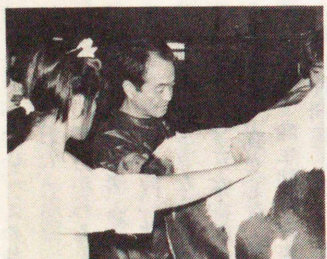
「頑張れ！ 何を弱音を吐いているんだ！」

頑張れ！何を焦っているんだ！」

と、私に語りかけてきたのです。その時の情景は、今でも鮮明に覚えています。

そしてもう一つの発見は、講習会最終日の前夜に、ホルスタインの仔が生まれたというので、誘い合つて見学に行つたときのことです。生まれてまもないその仔牛の体毛は、まだ濡れていて、それでも一生懸命に立ち上がろうとするのです。その時、「はっ」とあるものを発見したのです。それは、蹄の地面との接地部分が、まだ丸いのです。牛を知っている人からみれば、つまらないことかもしれませんが、私にとっては、大きな発見でした。そして、その丸い底の蹄でふんばり、立った時は、ただただ嬉しかったのを覚えています。

つまらない事でも良いと思います。君も何か発見して



自分をささえてくれた仲間達

——全てを収穫祭にかけた男

畜産学科4年 西川 二郎

とにかく、無心で今までやってきたようだ。勉強？ではなく、収穫祭を含めた課外活動と言うものに、力を注いできたようだ。今、「ようだ」と締めくくったのは、自分でも、わからないうちにうちこんできたからだろう。でも、今、満足感でいっぱいである。思い出がたくさんあって、これを書こうとすると、「ふじみの」一冊あっても足りない。また、思い出と同じ位多くの仲間ができた。何十人いや、百人越しているだろう。この数多くの仲間によって、四年間支えられ、生きてきたような気がする。

いつも、朝まで飲み明かし、マジメな話を、ワイ談を途切れる事なく語り合った。ブラジルにいる、H・Y君一年の時から、苦勞、悔し涙、嬉し涙を共にしてきた、J学科のS君。悩み事を持ち掛けると、いつも、我が事のように相談ののってくれた、T・W君は、君は、四月から、公務員だよ。本当の付き合いは、四年からだっただけ、狂ったように歌い、十月には、共に収穫祭の成功、宣伝隊の成功目指して頑張ったN君。……あられ

ば、きりが無い、この他にも、多くの仲間が、自分の周りにいてくれた。

しかし、四月からみんなバラバラになってしまふ。一般企業に勤める者、建築会社を継ぐ者、酒を一生造る者、公務員になるもの。北は北海道から、南は九州まで。一生逢う事のできない仲間もいるだろう。でも僕は一生忘れない、何才になっても、二十二才のままの君の姿を。みんなも、僕を忘れないでほしい。みんなは僕にとつて、農大で四年間の青春を送った、証しなのだから。

僕は仲間達と共に、今年の三月でこの農大を去ります。これからは、兵庫の田舎の、一酪農家として、一生を送る事になります。いろんな苦難が待ち受けていると思ふけれど、そんな時こそ、仲間の顔を思い出して、頑張っていると思ふことです。

最後に、四年間、陰から僕を、時にはやさしく、時にはきびしく、励ましてくれた○さん(女性) 本当にありがとう。そして、これからもよろしく。

あの時に君がいたから素晴らしい
青春送れた ふと今思ふ

——全てを収穫祭にかけた男より

二度目の収穫祭を終えて

畜産学科三年 古谷 栄

どんな小さなことでも、最後までやりぬくことが、どれだけすばらしいことか。私は、農大生及び地域住民をも沸かせる一大イベントといっても過言ではない、収穫祭に参加することで、身をもって体験した。

昨年、私は、ある人から、収穫祭に参加してみないかと、さそわれた。だが、そんなものに参加したところでは何か変わるわけでもなし、別に参加することが強制でない限りやりたくもないと、考えていた。しかし、大学に入った以上、何か、大学生活で変わったことをしてみたいという思いが、私を収穫祭に参加させた。

とりあえず、前夜祭特別企画、野外劇の二つを手伝うこととなった。私は特に、野外劇の大道具ということになった。とりあえず、十人程度で、野外劇のバックボードを作る事となった。作業は、一ヶ月前に始まり、野外劇の台本にあった下絵を考え、材料を集め、組立て、そして下絵をベニヤに描き、仕上げにペンキで塗るといふ具合に、作業は進み、役者、そしてバックボードともに、一ヶ月の長く辛かった日々の成果が出来上がった。そして、本番の日となり、皆がそれぞれにこの一ヶ月

の思いを胸に秘め、それぞれの役目を果たした。その結果、特別企画総合五位、野外劇三位となったが、野外劇に関して言わせていただければ、今回、あれだけ頑張ったことだけの成績を取ることができたという喜びと同時に、もう少しだったのになぜ賞がとれなかったのかという、悔しさが、胸にこみあげ、来年こそはと、決意した。そして今年、昨年の悔しさを今年に懸け、二度目にチャレンジした。今年も、昨年と同じ段取りで、準備が進んでいくはずだったが、昨年に比べ、人の集りが悪く、半数以下の人数しか集らず、準備を始めるのが、収穫祭本番の三週間前に、押し迫ってからになってしまった。とにかく、本番までにはと、連日連夜頑張ってくれた。二年生の長田君には、感謝の一言である。文句もいわずに、一人の時も、少しでも、本番にまにあわせようと夜遅くまで頑張ってくれた彼には、頭が下がる。又、与えられた事を何も言わずに、もくもくと仕事をにつけ、電車がなくなり帰れなくなる、彼、彼女たちがいた。本番の日が来た。皆、緊張している。なんとかまにあったバックボードを、家畜苑の人たちの手を借り、舞台へ上げ、劇は終り、幕をとじた。審査結果は、何と、アト賞、信じられなかったと同時に、なぜか、涙がとまらなかつた。今年、賞を取ることができたのは、参加したみんなの努力の賜物であり、けっして、独りの力により得られるものではない。そして、私に、収穫祭に参加することが、すばらしいことだと、教えてくれた人々に感謝したい。

佐渡島紀行

畜産学科二年 神 永 憲 一

その日は朝から天気良かった。最高のドライブ日和だった。でも、出発は夜の十時、夜になると日中の晴天がたたってしまい、西の空が青白く光を放つようになっ
てしまった。雷になってしまったのです。

俺達四人、車二台は、夜九時半に、国道五十号のドライブインに集合することになっていた。三人は俺の高校の時の先輩、友達、後輩です。俺と先輩（島田さん）が同じ車、友達（鈴木）と後輩（金野）が同じ車で予定時間より多少遅れて出発した。この計画は、茨城から四人、中部から三人（神谷、近藤、永田）で進行したが、神谷達は、一日早く佐渡へ渡り、二日目に現地で合流することになっていた。

八月十二日、夜十時を少しまわって、俺達はドライブインを後にして、前橋方面へ車を走らせた。走るにつれて青白い光と雷鳴は強くなっていき、そのうちにフロントガラスに雨粒が当りはじめたかと思うと、ほんの数分で前が見えなくなるような激しい雨になってしまった。群馬に入ると、もう最高に達していたが、三十分程で小降りになり、車内が蒸しはじめたために、窓を全開にし

て走ることにした。すると前方右側に大きな水たまり、さらにその先には巾の広いライトが二つ、窓を閉める間もなくトラックが来て、体半分、ドロ水のシャワーをあびてしまった。後ろから来る鈴木に無線で知らせる間もなく、同じようにドロ水のシャワーをあびていた。

前橋から関越自動車に入ってから、雨には悩まされた。前の車が水しぶきを上げて走るため視界は最悪の走行条件だった。しかし俺は負けない。日頃俺の車に乗っている人ならわかると思うが俺はステアリングをにぎると、人格が変わってしまうのだ。（今年からは人格を変えないように心がけるつもり）俺は次第にスロットルを開けていき、気がつくともーターの針は百四十km/hを指していた。

一回目の休憩場所である赤城高原SAに入ったのは夜の十二時を過ぎていた。ここで食事を取る予定だったが、帰省ラッシュと重なり二十分程休憩を取り、ドライブ交換と給油をして出発した。少し走ると赤いテールランプが連なっていた。渋滞にまきこまれてしまった。ラッキーなことに俺は助手席だったので当然寝ることにした。どれくらい寝たろうか、目が覚めるとまだ渋滞の中だったのでまた寝ることにしたが、車の内で熟睡するのは根性が必要だった。今度目が覚めてみると渋滞からぬけていた。この渋滞の原因は、関越トンネルに入るのに、車線減少するためだった。この関越トンネルで俺達は死ぬところだった。運転していた先輩が後で言って

いたが、居眠りをこいて、壁にぶつかりそうになったと言われて俺は、ビビりまくりました。二度目の休憩を取るために塩沢石打SAに入り体を軽く動かしてドライブ交換なしで走り出た。そこから長岡インターチェンジまで休憩なしで走った。空がだんだんと明るくなるのがわかり長岡ICをおりる頃には周りの景色がはっきりと見えるようになっていた。ICをおりてここからは一般道を走るのでどのコースを走るか打合せをして、ドライブ交換を行い夜明けの国道へと走り出た。計画では三条市まで走って寺泊港へ行くつもりだったが、途中で来るかどうか曲がるはずの道を曲がらずに行ってしまった。三十分程のロスをしてしまったが、早朝だったので道は貸切り同様で、このまま貸切りにしておくのもいいないと思ひ、速度警告音を聞きながら走り走って、カーフェリーのりばの寺泊港に着いたのは、八月十三日の朝六時を過ぎた頃で出発までは二時間の余裕があった。でもその前には何台かの車がすでにそこにはいた。二時間、俺のもっていったテレビを見ることがしたのである。

カーフェリーにゆられる事二時間、甲板で日光浴しながら無駄にすごしてしまった。ついた所は佐渡島赤泊港、ここで神谷達三人と合流する予定だったが、道が狭いため、先に行っていた三人は来るのが大変らしくて宿で合流することになった。港で合流すれば予定はクリアできるはずだった。でも道走ってみてたしかに道が狭くて大変だということがわかった。車二台が通るの

がやっとの道幅だった。海は青くすみわたり、景色は最高だったので宿まで四十分程の道のりも大変ではなかった。でも空腹感忘れられなかった。なんせ茨城を出てからろくに食事もとっていなかったからで、宿につくと、三人と合流して早速市内へと向うつもりだったが三人の中の一人が鈍くさく手間だったが、やっとな三十分かかって市内にたどりついた。そしてやっとな食事をすることができた。一息ついていて初めてお互いに挨拶をかわし、どこへ行くか決めることにした。予定通りにコースを回るには無理があった。それに目的がそれぞれ違っていた。とりあえず両津市から弾崎に向けて走ることにしたのであるが、俺達二台は無線を積んでいたのが通信ができた問題は神谷達の車、話すことができないので一台だけ孤独に走っていた。

弾崎は通過してしまい、Uターンするのもめんどうなので、何をするでもなく走っていた。しばらく走ると、島田さんが小さな山のような丘のようなものをみつけて一言、「登る」と言い出した。その山は三十分程で登ることができたが、しばらく山に登っていなかった俺は、とつてもぎつかった。でも頂上にとり着いた時の快感は今までの疲れをいやしてくれた。この山に登ったのが、後々大変つらくなることになってしまった。山を降りて車に乗ると、軽い疲労と振動で眠気がおそってきた。まぶたにおもりでもつけたように重く感じた。その時、またまた関越道と同じように助手席にいたが、無線

が鈴木から入り「ねむい」と言ってきたため俺は、その車のドライバークラスになった。でも、少し走ると俺も限界を感じはじめた。こうなると窓を全開にして風を入れても音を大きくしてもダメだった。四人がこの限界を感じていたはずだった。なんせ一晩中ほとんど寝ずに走っていたからだ。

海岸沿からはなれて大佐渡スカイラインに入った。もちろん走り走ってコーナーを攻めた。途中には、ゴールデン佐渡と言われる金山跡があり、そこを少し見学したが、鉱内に入ると、ひんやりして眠気も覚めてしまった。中には、ろう人形があり、昔の作業が再現してありそれも人形が動くのでリアルに再現していた。それを見る限りとても苦しく辛い作業であったと思う。俺は絶対にあんな作業には耐えられない。

大佐渡スカイラインは上に行くに従って霧がかかってしまい、せつかくの景色も全然見えなかった。それどころか10m先も見えないような濃霧になってしまったが下りはじめると視界も広くなり、街並も見えるようになり、山をおりる頃には、夕陽も沈んで闇に包まれていた。

宿に着いたのは、七時を過ぎていました。もちろん宿についてやることはひとつ、風呂上がり冷たいビールを飲むことです。これがまた、疲れた体には最高の薬だった。今でもあの味、のどごし、忘れられないものがあります。

二日目は釣をするという話もありましたが、時間の都合で午前中だけ海で遊ぶことにした。この海が冷たくて、とても青く澄み海底が見えるほどでした。どこかの

ゴミの多い、人であふれている海に入って喜んでいたり、あのきれいな海で遊んだほうがどれだけ感動するか一度行ってみる価値はあると思います。カーフェリーの出発時間は四時四十分、それに合わせて海から上がり食事を取って、赤泊港には、一時間前にはつき、そこで釣をしたが全然引く様子もなく、すぐにおわりにした。カーフェリーは、時間より遅れて出発したので甲板で水平線に沈む夕陽を見ることができた。日本海を赤く染めて沈む太陽は、とっても、とってもきれいでした。この夕陽を見るのが俺の目的だった。寺泊港に着いたのは七時前で、あたりは夕焼けのあかみを少し残して闇へとすいこまれていった。寺泊では、七人で最後に食事をとって、それぞれの帰路へとついたのでした。

走行距離	917.4 Km
走行時間	往路 約8時間 (茨城～寺泊)含休憩 復路 約12時間 (寺泊～茨城)含休憩
使用燃料費	80.5ℓ 燃費11.4 Km/h
給油回数	2回
使用車種	スカイライン、スターレット ファミリア
費用	高速料金 7,000円 ガソリン代 10,308円 カーフェリー代 23,600円(含ドライバー) " 2,380円(一人往復)
宿代	5,200円

(数値はスカイライン使用の場合)

農業実習

一年生方弘子

久しぶりに友達に会える嬉しさと、先輩方に聞かされていた実習の辛さの恐怖心が入り混じった複雑な心境で厚木に着いてしまった。これから七泊八日、私の身に一体何が起るのだろうか。八日間、耐えられるだろうか。

厚木農場に着き、一休みすると、もう実習が始まった。一日目は農業機械だった。車の免許を持っていない私は、おそるおそるトラクターに乗り込んだが、後ろにいてくれる練習生に怒られながらも、どうにか操作できるようにになった。次の日、学歌に起こされ、この実習で一番苦しいと思った朝実習が始まる。空腹と睡魔が襲ってくる。とてつもない広さの草道を、汗を流したならせながら鎌を振る。時には刈っているそばをバツタが飛び跳ねたり、イモムシが動いていた。私がこの世で一番嫌いな蜘蛛が潜んでいたこともあった。しかし、一時間余りが過ぎ、背後をふり返ると、見事に一筋の草も残さず刈られている。私は「皆で力を合わせれば出来ない事は無い。」ということを知った。朝実習で学んでしまった。家畜

や家畜の実習は最も私が楽しみにしていたものだった。豚や鶏に飼料を与えたり、体重を測ったり、ワクチンを射ったり。「こんな事もしなくちゃいけないの?」と思いつけすぎて、屋根の下を豚を赤くしてしまっただけは何を隠そうこの私です。蛙のいる水田に裸足で入り、泣き叫びながらヒエどころかイネさえも手にしていた普作、何と言っても高橋先生のとんでもない駄洒落が印象深かった特作。しかしやっぱ楽しかったのはボンファイヤーだった。パーベキューを食べながら、先生の話を伺ったり、また各部屋ごとのスタンツが傑作だった。私達の部屋では、女だてらに組体操をして十人ピラミッドを披露してしまっただけ。ファイヤーを囲んで青山ほどり、そして夜の集いで練習してしまっただけ。蒙古放浪の歌を歌った。最初は、朝、研修センターを出て、本部前へ向う長い坂を、「もう帰ろう、絶対帰ろう。」と言いつつ登ったものだが、最終日には、「今日で最後だ。」と思うと淋しく感じてきた。八日間の実習では、一般農業について学んだことはもちろん、今まで話したことなかった先生や友達と親しくなれた事など、私にとって貴重な時間が持てたと思った。二年での富士畜産実習が今からとても楽しみである。

思い出のオリエンテーション

一年 小野郁子

農大に入学して早一年。何だか、あッという間の、そして恥のかき通しの一年であったように思います。それでも、とにかく楽しい農大生活に、私は大変満足しています。

私の楽しい、恥かき農大生活の始まりは、忘れもしない、あの四月のオリエンテーションからでした。私達畜産学科は富士畜産農場にて一泊二日のオリエンテーションを行ったのであります。あの日、何故か四月の異常気象、富士は雪でした。寒くて寒くて……。しかし、そこは体力勝負の畜産学科のこと、寒さにも負けず、可愛い、可愛い牛さんのもとへと歩み寄っていったのです。そこでは、搾乳などを見せてもらい、畜産学科の面々はもちろん、私も含めて満足顔。畜産人としての第一歩を踏み出す顔がそこにありました。こんなふうに満足をして宿舎の方へ戻ってくると、皆が私の周りで「何かニオウ」と言い始めたのです。そうです。私のジャンパーに牛のニオイがしみついてしまい、とれなくなっていたのです。それでも外は雪。ジャンパーがなくては寒くて過こ

すことができないので、染まってしまった。ジャンパーを着ていました。入学早々、ジャンパーまで農大色に、畜産臭に染めてしまった私でした。

農大に染まったのがジャンパーだけならまだ良かったのですが、それが次の日にまで尾を引こうとは……。二日目に先輩方が企画して下さったバレーボール大会なるものがあつたのです。高校時代からバレーボールが大好きだった私は、久しぶりにバレーボールができるという事で、大変喜んでいたので。後でどういふ結果となるかも知らずに……。このバレーボールのチームはほぼ、学籍番号順で男女混合のチームだったので、まさか数あるチームの中から私達のチームが最下位に選ばれてしまうなんて、そんな光栄な話考えるはずもありません。ところが選ばれてしまったのです。最下位に……。とうとう一勝もできずに。その結果、光栄にも、学科全員の方々が見守る前で、まだ覚えてホヤホヤの「青山ほとり」つまり、「大根踊り」を踊らせて頂くことになったのであります。その初々しい姿は、どなたかが親切にも写真におさめて下さったので、今でも鮮明に残っています。

このような訳で、私は入学早々、恥をかきつつも、農大色に徐々に染まり、一年間を過ごしてきたのであります。今後、更に深い緑色へと染まっていくのでしょうか、私は。

詩 タンポポ

歌……山下俊也

雪の下のふるさとの夜
冷たい風と 雪の中で
青い空を 夢に見ながら
野原に咲いた花だから

どんな花よりタンポポの花を
あなたに贈りましょう
どんな花よりタンポポの花を
あなたに贈りましょう

ガラスの部屋のバラの花より
嵐の空を見つめ続ける
あなたの胸の思いのように
心に咲いた花だから

どんな花よりタンポポの花を
あなたに贈りましょう
どんな花よりタンポポの花を
あなたに贈りましょう

研究室だより

昭和六十三年
畜産学
卒論題目

家畜繁殖学研究室

我が家畜繁殖学研究室は、主任教授の一戸教授をはじめ、石島教授、門司講師、桑山副手の指導の基、大学院生3名、研究生2名、四年生28名、三年生27名の室員から構成されています。室員は各自の希望により次の班に別れます。

一戸教授の指導による家禽班(第一実験室)、石島教授の指導による実験動物班(第三実験室)、門司講師の指導による大家禽、牛班・豚班(第二実験室)の三実験室からなり、精子・卵子・ホルモン等についての研究に励んでおります。

各実験室では、週一回のゼミナールを開いて、文献を読んでの討論や卒論の説明など、お互いに知識を交換し研究をより一層中身のあるものにするようにと、努力をしています。

また、当研究室は家畜人口授精の講習を受けるにあつても、普段から家畜繁殖に関する研究にたずさわっているため、日常飼育管理の中から学びとれるものがあるが、

ると思われます。研究の主要テーマとして「家畜の人口授精に関する研究」、「家畜の繁殖整理に関する研究」、「家畜の性現象の人為的支配に関する研究」と様々です。その他、我が研究室では、コンパも多くひらかれますが、大人数のわりにはまとまった研究室です。特に収穫祭においては、一層の団結力を見せ毎年その成果が発揮されます。

学籍番号 氏名 卒論題目 指導教員

フ84 015 稲 武司 豚精子の代謝に関する研究 I 門司

特に凍結処理過程における代謝抑制剤の影響について I

フ84 029 大森 重則 受精卵移植による過排卵処理ラット子宮の正常性の検討 石島

フ84 033 奥田 毅 牛の受精卵移植に関する研究 I 特ニ牛胚の活力判定について I 門司

フ84 035 折笠慎一郎 豚精子の受精能獲得に関する研究 I 新鮮および凍結融解後の精子先体反応について I 門司

フ84 039 片小田雅夫 家兎胚の錠剤化凍結法における凍害保護物質の検討 石島

フ84 052 楠 京市 過排卵処理家兎の着床前後における子宮組織のALP活性の推移 石島

フ84 062 小林由紀子 ゴールデンハムスター4細胞期胚の体外発育におよぼすDTAの影響 石島

フ84 070 佐伯 智文 スナネズミの過排卵におよぼすEstradiolの影響 石島

フ84 073 坂本 利彦 雄鶏の性成熟に伴うクロアカ腺の組織学的変化 一戸

フ84 074 坂本 宏樹 豚精液の凍結速度が精子生存性におよぼす影響 門司

フ84 076 佐藤 京子 家兎の非外科的採卵に関する研究 石島

フ84 080 清水 博文 等電点電気泳動像によるギフチョウ属の地理的変異に関する研究 一戸

フ84 088 鈴木久美子 アルビノスナネズミの過排卵誘起に関する研究 石島

フ84 094 高橋 宏之 ホロホロ鳥成熟雌における血中プロジェステロン、テストステロン及びエストラジオール濃度の季節的変動 一戸

フ84 107 千葉 亮 岐阜地鶏の就巢期における血中性ステロイドホルモン濃度に対するLH投与の影響 一戸

フ84 111 鶴見 靖子 ラット子宮内胚の非外科的採取に関する研究 石島

フ84 113 寺澤 深志 魚油とラードの混合比率の異なる油脂投与により脂質代謝変動 一戸

フ84 114 寺田 勝彦 In vitroでの豚卵胞卵の成熟について 門司

フ84 117	東谷 昌平	岐阜地鶏雌鶏の就巢期間の短縮が卵巣機能の回復に及ぼす影響	石島 門司
フ84 121	中條 康治	チャイニーズハムスターの過排卵誘起に関する研究―特にPMSGとHCGの投与量の検討	石島 門司
フ84 122	成瀬 薫	豚精液における希薄部ならびに濃厚部精子の乳酸蓄積量について	門司
フ84 125	西川 二郎	卵黄粉末を用いた保存液による山羊精液の凍結保存に関する研究	門司
フ84 126	花田 伸一	摘出子宮内で培養した山羊精子の形態的变化について	門司
フ84 125	長谷部すなお	マウス胚の非外科的移植に関する研究	石島

畜産物利用学研究室

本研究室は、昨年四月より、旧肉利用学研究室と、旧乳利用学研究室とが、統合され新生「畜産物利用学研究室」として、再出発しました。室長の山中良忠教授をはじめ、鶴田文三郎嘱託教授、古川徳講師、松岡昭善講師の4名の先生方の御指導のもとに、大学院生4名、四年次生36名、三年次生4名、二年次生1名の室員一同が皆協力し合い、活発なる研究室活動を行なっています。

研究テーマは大きく次の六つに分けられる。

- 食卵の利用と品質低下に関する研究。
- 食肉の品質に関する研究。
- 食肉の肉種鑑別に関する研究。
- 各種タンパク素材の物理的性質に関する研究。
- 畜産物の高分子物質の生理活性に関する研究。

また、加工利用では、消費者に対して有効でよりソフトな食品の開発に心がけ、畜産物とその副産物に限らず前向きに食品の開発に取り組んでいる。さらに、加工所における実習を通じて製造設備、製造技術への理解にも努力しています。

その他の主な活動としては、月例のゼミナール、五月に新入室員歓迎会、夏の製造実習、秋の収穫祭参加、初

フ84 131	平木真砂己	雄ホロホロ鳥における照明条件の差異が性成熟におよぼす影響	石島 門司
フ84 133	廣江 保久	ビデオストロボ装置を利用した山羊精子の運動性の観察	石島 門司
フ84 162	山野 博昭	雌鶏の性成熟に伴う卵巣の組織学的変化	石島 門司
フ84 176	若菜 俊敦	シリコンチューブを用いた豚精子の大量凍結について	石島 門司
フ86 604	岸 哲也	豚希薄部精液の濃縮凍結に関する研究―特に遠心用希釈液中の各種蛋白質の効果について―	石島 門司
フ83 105	中山 昭洋	牛受精卵の凍結保存について	石島 門司

冬の研修旅行、二月の卒業論文発表会、卒業生送別会がありこうした行事にはすばらしい団結力を発揮し活動しています。

本年度の卒業論文題目は次の通りです。

学籍番号	氏名	論文題目	指導教員
フ84 022	白井 立美	ケフィールの投与がマクロファージの貪食能におよぼす影響	古川 山中
フ84 038	櫻村奈緒美	発酵乳の溶血ブラック形成細胞におよぼす影響	古川 山中
フ84 040	片山 千華	遅延型過敏反応におよぼす発酵乳投与の影響	古川 山中
フ84 044	金田 総子	加熱によるβ-ラクトグロブリンの抗原性の変化について	古川 鶴田
フ84 050	北島 千総	腫瘍転移を指標としたケフィールの生理活性について	古川 山中
フ84 095	高松 洋子	多糖産生菌の育成条件とその諸性質について	古川 山中

784 127	784 086	784 083	784 078	784 075	784 049	784 032	784 145	784 140	784 134	784 124	784 119	784 108	784 105	784 096
林 孝憲	菅田 修	白濱 直樹	佐奈 広隆	佐々木興一	岸田 義範	小笠原 徹	松林 泉	星野 茂生	福崎 直美	萩原 久	永田 善洋	塚本 富雄	丹下 健三	滝口 正孝
ミオグロビン抗体による肉種鑑別に関する基礎的研究	パークシャー種無去勢雄と雌の肉質の差異	酵素組織化学的方法による三元雑種豚(LWD)の筋線維型並びにその構成割合	酵素組織化学的方法によるヨークシャー種の筋線維型並びにその構成割合	三元雑種(LWD)の肉質における性差	電気泳動法による市販肉(主として哺乳類)肉種鑑別に関する研究	電気泳動法を用いた肉種鑑別における有効タンパク質・酵素の検索	乳酸菌の生成した多糖組成について	ホロホロ鳥の卵成分におよぼす飼育環境の影響	未利用カルシウム源の利用法に関する基礎的研究	ヘテロ乳酸発酵製品中の有機酸測定法の検討	実験的腫瘍転移モデルを用いた発酵乳投与の影響	マクロファージ活性におよぼす発酵乳の効果について	鶏卵二次加工品の貯蔵中における生菌数の変化について	鶏卵の加熱条件および貯蔵条件がリゾチーム活性におよぼす影響
松岡 天野	松岡 (伸)	松岡	松岡	松岡 (伸)	松岡 天野	松岡 天野	山中 古川	山中 古川	山中 古川	山中 古川	古川 山中	古川 山中	古川 山中	山中 古川
783 132	786 606	786 603	784 168	784 163	784 158	784 142	784 028	784 010	784 006	784 002	788 607	785 502	784 154	784 149
松田 哲也	程 建憲	加藤 俊朗	吉村 浩明	山野 裕	谷田部優子	細田 徹	大竹 雄一	磯部 彰	有岡 鍛	青柳 浩	古川 秀路	南 堵鉉	村尾 政彦	宮川 幾代
血清β ₁ グロブリン抗体による肉種鑑別の基礎的研究	電気泳動法による畜肉以外の肉食哺乳類の肉種鑑別に関する研究	無去勢豚のと体成績および理化学的状態に関する研究	電気泳動法による市販(主として鳥類)の肉種鑑別に関する研究	桃園種の肉質に関する研究	ヘモグロビン抗体による肉種鑑別に関する基礎的研究	α ₂ -マクログロブリン抗体による肉種鑑別に関する研究	酵素組織化学的方法による桃園種の筋線維型並びにその構成割合	食塩代替品を用いたソーセージの品質	凍結肉の肉質に関する研究	酵素組織化学的方法によるパークシャー種の筋線維型並びにその構成割合	飼育環境がホロホロ鳥の脂質画分におよぼす影響	乳酸発酵によるホエー蛋白質区分の変化について	ナチュラルキラー細胞活性におよぼす発酵乳の影響	ヨーグルトの経口投与がルイス肺癌の肺転移におよぼす影響
松岡 天野	天野	松岡 (伸)	松岡 天野	松岡 (伸)	松岡 天野	松岡 天野	松岡	松岡	松岡	松岡	古川 山中	古川 山中	古川 山中	古川 山中

784 145	784 140	784 134	784 124	784 119	784 108	784 105	784 096
松林 泉	星野 茂生	福崎 直美	萩原 久	永田 善洋	塚本 富雄	丹下 健三	滝口 正孝
乳酸菌の生成した多糖組成について	ホロホロ鳥の卵成分におよぼす飼育環境の影響	未利用カルシウム源の利用法に関する基礎的研究	ヘテロ乳酸発酵製品中の有機酸測定法の検討	実験的腫瘍転移モデルを用いた発酵乳投与の影響	マクロファージ活性におよぼす発酵乳の効果について	鶏卵二次加工品の貯蔵中における生菌数の変化について	鶏卵の加熱条件および貯蔵条件がリゾチーム活性におよぼす影響
山中 古川	山中 古川	山中 古川	山中 古川	古川 山中	古川 山中	古川 山中	山中 古川
784 028	784 010	784 006	784 002	788 607	785 502	784 154	784 149
大竹 雄一	磯部 彰	有岡 鍛	青柳 浩	古川 秀路	南 堵鉉	村尾 政彦	宮川 幾代
酵素組織化学的方法による桃園種の筋線維型並びにその構成割合	食塩代替品を用いたソーセージの品質	凍結肉の肉質に関する研究	酵素組織化学的方法によるパークシャー種の筋線維型並びにその構成割合	飼育環境がホロホロ鳥の脂質画分におよぼす影響	乳酸発酵によるホエー蛋白質区分の変化について	ナチュラルキラー細胞活性におよぼす発酵乳の影響	ヨーグルトの経口投与がルイス肺癌の肺転移におよぼす影響
松岡	松岡	松岡	松岡	古川 山中	古川 山中	古川 山中	古川 山中

家畜生理学研究室

生理学とは、国語辞典でひくと「生物体のはたらきを研究する学問」であるとしられています。科学がいくら進歩したといっても、まだまだ生物体には、謎の部分が多いのです。また既に解明されていると思われる事柄でも、その謎の部分人間に都合のよいように解釈して、正しいこととしているのかもしれない。生物体の複雑且つ精巧な機構を解明する為には、地道な実験の積み重ねと、得られた結果に対する正確でしかも客観的な判断力が要求されます。

我が家畜生理学研究室では、前記の事柄を常に念頭に置き、「家畜・家禽の代謝に関する生理遺伝学的研究」「家畜・家禽の体液に関する免疫学的並びに血清学的研究」「家畜・家禽の細胞膜に関する研究」「家畜・家禽の内分泌生理に関する研究」の四つを主要テーマとして、それぞれ畜産物の生産向上という畜産学における一大目標に向けて日夜励んでいます。

室員構造は渡辺誠喜教授をはじめとして、半澤助手、院生2名、四年次生11名、三年次生15名、よりなりたっています。飼養家畜は、めん羊、やぎ、兎、モルモット、鶏、鶉と種類、飼育頭羽数、共に豊富であるため、これらの日常管理に苦勞することもあります。その半

面これら動物に接する機会が多く、学生室員自身の経験から、多くの事柄を学び取ることができて非常に有意義であり、且つ楽しいものがあります。室員の構成人数が比較的少ないため学生一人一人の存在が大きく、且つ重要なものとなっております。それだけに自分というものを出していくことのできる研究室だと思っています。

研究室の年間行事としては、新入室員歓迎会、研修旅行、卒業論文発表会、卒業生送別会なども行なう一方、年間を通じて週一回の室員によるゼミナール及び談話会、学外講師による特別講演会、富士農場実習などがあり、これらの成果を室報にまとめて発行しております。

学籍番号 氏名 論文題目 指導教員

フ84 003 阿部 雅充 鶏赤血球中のカルノシン及びアンセリンの濃度変動について 渡辺

フ84 011 伊藤 郷子 ウズラの性成熟に対する異なる光波長と照明時間の影響について 渡辺

フ84 013 糸山 隆一 緬羊赤血球アルギナーゼに関する生理遺伝学的研究 渡辺

フ84 047 川上 衣乃 白色レグホンの羽毛並びに爪嘴鱗のケラチンの電気泳動的差異 渡辺

フ84 051 木村 恵子 馬赤血球のBASシステム及び渡辺

フ84 155 村田登巳江 ARGase システムと赤血球膜のアミノ酸透過性との関係

フ84 150 三宅 康弘 ウズラの産卵に伴う植物性凝集素に対する凝集原の消去に関する研究 渡辺

フ84 152 宮崎 英国 ウズラの羽毛並びに爪嘴鱗のケラチンの電気泳動的差異 渡辺

フ84 156 村本真麗子 ウズラの血清IgGの濃度の系統間差異に関する研究 渡辺

フ84 159 山内 徹也 緬羊の成長に伴う血清蛋白、Albumin Transferrinの濃度変化に関する研究 渡辺

フ84 167 吉見 直 緬羊の成長に伴う血清蛋白特に免疫グロブリン濃度の変化 渡辺

畜産経営学研究室

当研究室は、荒井助教授、石岡講師の指導のもと、四年生32名(うち2人は海外実習のため休学中)、三年生22名で構成されています。

わが研究室では、畜産の経営経済的な面の研究が主でいわば技術と経済の接点となる「経営」問題がとりあげられています。

研究室は原則として全員室員制をとっています。家畜はいませんが、毎日当番制があり、また酪農、肉牛、養豚、養鶏、馬の五つの班のいずれかに必ず属することとなっています。

研究室の日常活動は、班別の自主的なグループ学習、パソコン学習会、畜産簿記ゼミの三つで、以上はすべて課外活動で、先生や先輩がその都度指導しています。

三年生は夏休みに15日間の農家実習が義務づけられています。決して楽ではないですが、農家の人々のやさしい指導のもとで、一生忘れることのできない体験となり畜産への関心が一層深まると思います。

パソコンや簿記は、これからの農業経営分析に欠かせないものであり、就職した先輩からもすぐに役立っているといわれています。パソコンソフトも完備し、図書や統計資料も完備しつつあり、あとはわれわれのやる気で

成果が決まるといってもいいでしょう。

学籍番号	氏名	論文題目	指導教員
フ84 017	井上 桂一	配合飼料価格の変動とその要因	石岡
フ84 034	小倉 臣恵	酪農家における婦人の役割	石岡
フ84 037	加倉井政寛	酪農における乳房炎の発生状況とその要因	石岡
フ84 058	小笠 敏雄	軽種馬生産の農業的意義	新井
フ84 061	小林 和子	卵価の統計的分析	石岡
フ84 066	小山 等	食鳥の生産及び輸入の動向分析	石岡
フ84 072	坂元 明雄	肉牛および子牛の価格変動	石岡
フ84 081	下山 賢司	地域農家の発展と農協の役割	新井
フ84 089	鈴木 澄男	乳用牛群能力検定成績の分析	新井
フ84 141	細井 通昭	生産調整下の牛乳取引条件と酪農家の対応	石岡
フ84 143	牧野 貴光	乳肉複合経営の成立条件	新井
フ84 144	増田 文子	食肉消費の地域性分析	石岡
フ84 147	三木 博史	畜産における労働生産性の進歩とその要因	新井
フ84 148	三橋 哲也	栃木県下ノ酪農経営における飼料構造の実態分析	石岡
フ84 160	山形 英三	酪農における労働生産性の分析	新井
フ84 164	山本 裕司	養豚経営の収益性とその要因	新井
フ84 166	吉田 聖幸	牛群検定制度と検定成績の分析	新井
フ84 169	米倉 秀樹	長野県下ノ牧場における経営分析	新井

フ84 092	関崎 淳二	養豚一貫生産における繁殖成績とその技術的要因	新井
---------	-------	------------------------	----

フ84 093	高田 卓二	酪農家経営における飼料自給率向上の意義と課題	石岡
フ84 097	武中 豊	学校給食における牛乳飲用の現状と課題	新井

フ84 013	田村 正道	和牛多頭肥育の経営分析ノ出荷成績を中心にノ	石岡
---------	-------	-----------------------	----

フ84 110	土屋 知己	農家と勤労者の生活水準の比較分析	石岡
---------	-------	------------------	----

フ84 116	中島 一子	わが国における馬の生産と分析	新井
---------	-------	----------------	----

フ84 136	藤崎 浩章	牛肉生産の日豪比較ノ日本の牛肉はなぜ高いかノ	石岡
---------	-------	------------------------	----

フ84 138	藤原 伸泰	徳島県阿波町における肉用牛肥育経営の現状と展望	石岡
---------	-------	-------------------------	----

フ85 607	平山 秀雄	産直における牛乳流通の事例分析ノ北部酪農協と東都生協	千葉 新井
---------	-------	----------------------------	-------

フ83 013	伊藤 弘行	地域農業の未来像ノ農家意向調査結果からノ	石岡
---------	-------	----------------------	----

フ83 035	蔭岡 保英	徳島県相生町における猪飼育の実態	新井
---------	-------	------------------	----

フ83 111	野崎 哲	遠野市における乗用馬生産の経過と将来への展望ノ遠野市乗用馬生産組合についてノ	新井
---------	------	--	----

家畜衛生学研究室

本研究室は、東量三教授、近江博明助教授、渡辺忠男講師、各先生の御指導のもと、4年生28名、3年生27名、2年生1名の室員が一体となって活発なる研究室活動を行なっている。

研究室活動としては、室員各自希望する家畜・家禽別に分け、生班・豚班・鶏班・実験動物班の4班に分かれ各家畜・家禽の疾病に対する予防法及び糞尿処理、環境

衛生などの研究を行なっている。
 また本学畜診療所においても一般外来動物の診療を中心にして各種の研究活動が行なわれている。
 その他研究室の活動内容は、年間行事を通して新入室員歓迎会、ソフトボール大会、収穫祭参加（文化芸術展・模擬店）、研修旅行、送別会、ゼミナールなどがある。
 このような、多面活動において学生生活の充実を計り、室員各自の個性を引き出し、その個性をもちより研究室独自の個性を創造するという事に我々は目標をおいている。

指導教員	氏名	論文題目	学号	学籍番号
天野 雅之	牛のケトン症に対する診断法の検討	近江	吉田	84004
石川 敏夫	ラットにおける精巢剔出後の臨床的变化について	近江		84009
浦 巧	春採湖（北海道）、多摩川（東京）に生息するバン及びカイツブリの生態について	渡邊		84024
大内 直人	日光地方に生息する野生ジカの内部寄生虫	東	近江	84025
谷山 浩史	路上排泄犬糞の内部寄生虫について	近江		84100
田原 和明	豚におけるヨード剤（PMP-11）子宮内注入の発情並びに受胎成績におよぼす影響	近江	鈴木	84101
田村 英之	犬糞の処理に関する研究（肥料としての有効性について）	近江	荻原	84102
土橋 知己	神奈川県厚木市近郊における牛病の発生状況について	東	近江	84109
手塚 英詞	ホロホロ鳥の発育に伴う血液性状の変化	渡邊	西脇	84112
永井 愛美	トリレオウイルスに対するホロホロ鳥の感受性について	渡邊		84118
長野 文和	豚におけるヨード剤（PMP-11）子宮内注入の血液並びに尿性状におよぼす影響	近江	吉田	84120
福田 麻美	猫の尿臭に対するグルメートの消臭効果について	近江		84135

柿田 一真	ヨード剤（PMP-11）による豚舎、鶏舎の消毒効果	東		84036
金井 康枝	路上排泄、犬糞の内部寄生虫について	近江		84043
倉田 詠子	ホロホロ鳥胎児肝臓培養細胞の応用に関する研究	渡邊		84055
蔵持 洋子	犬の歯周炎に関する研究・歯垢の付着状況について	東	近江	84056
駒野 雅彦	ラットにおける精巢剔出後の血液性状について	近江		84064
小山 誠哉	簡易公園内排泄犬糞の内部寄生虫について	近江		84056
須川 敏行	牛の肝臓機能検査法の検討	近江	吉田	84084
田代 義尚	飼育環境の違いがホロホロ鳥におよぼす影響について	渡邊		84098
宮崎 康平	MYCOPLASMA SYNOVIAEに対するホロホロ鳥の感受性について	渡邊		84151
望月 貴子	多摩川全域における哺乳類の分布について（主に環境の相違と地上性少哺乳類との関係）	北原		84157
山口富士雄	犬の歯石に由来する細菌（特にグラム陽性桿菌について）	東	近江	84161
岡田 努	ヘイキューブ給与めん羊のルイメン菌検索	東		85501
金子孝太郎	養鶏の光線管理下における衛生昆虫の動態について	渡邊		83036
三浦 伸子	評価済み			83135
都築 英成	休学中			82102
八谷 健治	神奈川県厚木市近郊における豚の内部寄生虫卵保有状況について	近江	鈴木	82166

家畜育種学研究室

家畜育種学研究室では、家畜改良の基礎となる遺伝学、育種学、特に血清学、細胞遺伝学、分子遺伝学的見地から、広範囲にわたり研究活動が実施されております。当研究室では、柴田寛三教授をはじめ、田中一栄教授、天野卓助教授の指導の下に古郡実験助手・大学院4名、4年生17名、3年生20名で構成され、室員各自の自覚と互いの協力により、それぞれの目標に向かって頑張っております。

研究室における日常の活動は、実験動物の飼養管理による家畜との接触や、毎週行なわれている定例室員会、ほかに、卒論等の研究、実験における問題点を解決する為、昼夜を問わず熱心に討論されております。さらに研究活動は学内だけに止まらず、先生方は学会や研究の為、海外に出張されたり、また学生も他大学及び他研究機関に向いて研究を行なっております。研究室における年間の主な行事としては、新入室員歓迎会、定期総会、収穫祭への参加、研修旅行、卒業論文発表会などがあります。因みに昭和六十二年の卒業論文題目は次の通りです。

学号	氏名	論文題目	指導員
フ84 016	井上 邦雄	血液蛋白型からみた2と3の牛集団の類縁関係に関する研究	天野
フ84 020	岩瀬 利哲	ホルスタイン種の血液蛋白型変異に関する電気泳動的分析	田中
フ84 021	岩附 鋭	ウシ、スイギュウならびガヤールの核型分析	天野
フ84 023	内田 雄大	等電点電気泳動法による山羊血液蛋白の遺伝的多型に関する研究(特にトランスフェリン型について)	天野
フ84 027	大澤 守弘	牛の血液型モノクローナル抗体作製に関する研究	天野
フ84 030	岡田 博行	サラブレッド種の血液蛋白型に関する研究	天野
フ84 045	鴨志田裕子	Gバンド分染法によるブタの染色体分析	田中
フ84 048	河本みちる	二次元電気泳動法による馬乳成分の分析	天野
フ84 067	小山 陽子	休尺測定値からみた細羊品種間の比較検討	田中
フ84 069	斎藤 肇二	牛の血液型モノクローナル抗体の作製に関する研究	天野
フ84 077	佐藤 浩	等電点電気泳動法による黒毛和種血液蛋白の遺伝的多型に関する研究	田中
フ84 082	庄田 雅一	二次元電気泳動法による馬体液成分の同定マップおよびその交差反応について	天野
フ84 091	角 雄一	韓国存来山羊の実験動物化に関する基礎的研究	天野

家畜育種学研究室

学号	氏名	論文題目	指導員
フ86 146	三浦 辰浩	DRIESCHの頭骨計測法によるフィリピン産のイノシシの比較検討	田中
フ86 605	坂上 正行	血液蛋白型から見た中ヨークシャー種の遺伝子構成	田中
フ83 101	中里 至	水牛精巢の細胞組織学的研究	天野

家畜飼育学研究室

十八世紀後半北ヨーロッパで始まった、家畜生産の基本的な思想を継承し発展させて行く事を目的として、即ち「如何なるものを? 如何様に? 如何程?」一給与したならば最良の家畜生産が行えるか?を研究目的としている。家畜飼養学は家畜管理学、家畜栄養学、飼料学を主な柱として成り立っている。当研究室では、これら複合分野の基礎をふまえ、杉村敬一郎教授、亀岡喧一教授、伊藤澄磨助教授、栗原良雄講師を中心とした指導のもとに、アミノ酸、脂肪酸、エネルギー代謝、サイレージ、牧草、飼養管理、飼育管理等について種々の研究活動を行っている。

研究室行事としては、富士農場における畜産実習、群馬研畜産試験場、浅間育成牧場に於ける家畜管理実習ならびに、一般飼料成分分析演習等を行っている。また室員相互の親睦を計るために、収穫祭の文展・模擬店への参加、ソフトボール大会、研修旅行、餅つき大会等を行なっている。

指導員	氏名	論文題目	学号	書籍番号
井野口吉正	乾 由理子	「トヨセリン散」に含まれる Bacillus toyoi のカビ生育阻害効果に関する研究	伊藤	伊藤
片山 敦文	唐沢 敬	高水分サイレージ開封後の生菌剤(バチルス トヨイ)添加が好氣的変敗に及ぼす影響 副題 化学的組成について	伊藤	伊藤
西脇 貴子	唐沢 敬	成兔における消化試験の予備期間の検討	伊藤	伊藤
久道 雄史	唐沢 敬	高水分サイレージの調整時におけるモミ殻添加 副題 モミ殻の形状の相違が栄養価に及ぼす影響	伊藤	伊藤
平沢 進	宮原 敏子	飼料中のスレオニン量の相違がニワトリヒナ(幼雛)の成長に及ぼす影響 副題 高温環境が中雛に及ぼす影響 特に肝臓及び血中遊離アミノ酸パターンに及ぼす影響	亀岡	亀岡
幾見 直樹	宮原 敏子	高温環境が中雛に及ぼす影響 副題 特にエネルギー代謝に及ぼす影響	伊藤	伊藤

熊沢 正敏	久保 勉	高水分サイレージの調製時におけるモミ殻添加 副題 モミ殻の形状の相違が化学組成に及ぼす影響	伊藤	伊藤
小町 茂	久保 勉	高温環境が中雛に及ぼす影響 副題 特に成長及び消化率に及ぼす影響	伊藤	伊藤
酒井 登	小町 茂	環境温度の相違が仔豚のエネルギー代謝に及ぼす影響	伊藤	伊藤
佐原 光春	酒井 登	NRC 一九七九年版 Nutrient Requirements of Swine の翻訳	伊藤	伊藤
田島 清	佐原 光春	飼料中のスレオニン量の相違がニワトリヒナ(幼雛)の血液、肝及び大腿筋のアミノ酸組成に及ぼす影響	伊藤	伊藤
今泉 節子	田島 清	環境温度の相違が仔豚のエネルギー代謝に及ぼす影響	伊藤	伊藤
今泉 節子	今泉 節子	反すう家畜を用いた消化試験予備期間の検討 副題 反すう家畜における給与飼料切換え後の順応状況	亀岡	亀岡
江口 征子	今泉 節子	キャッサバミールが鶏の成長及び消化に及ぼす影響	伊藤	伊藤
平岡 守	江口 征子	キャッサバミールが鶏の生産物、特に肉に及ぼす影響	伊藤	伊藤

指導員	氏名	論文題目	学号	書籍番号
井野口吉正	乾 由理子	「トヨセリン散」に含まれる Bacillus toyoi のカビ生育阻害効果に関する研究	伊藤	伊藤
片山 敦文	唐沢 敬	成兔における消化試験の予備期間の検討	伊藤	伊藤
西脇 貴子	唐沢 敬	高水分サイレージの調整時におけるモミ殻添加 副題 モミ殻の形状の相違が栄養価に及ぼす影響	伊藤	伊藤
久道 雄史	唐沢 敬	飼料中のスレオニン量の相違がニワトリヒナ(幼雛)の成長に及ぼす影響 副題 高温環境が中雛に及ぼす影響 特に肝臓及び血中遊離アミノ酸パターンに及ぼす影響	亀岡	亀岡
幾見 直樹	宮原 敏子	高温環境が中雛に及ぼす影響 副題 特にエネルギー代謝に及ぼす影響	伊藤	伊藤

熊沢 正敏	久保 勉	高水分サイレージの調製時におけるモミ殻添加 副題 モミ殻の形状の相違が化学組成に及ぼす影響	伊藤	伊藤
小町 茂	久保 勉	高温環境が中雛に及ぼす影響 副題 特に成長及び消化率に及ぼす影響	伊藤	伊藤
酒井 登	小町 茂	環境温度の相違が仔豚のエネルギー代謝に及ぼす影響	伊藤	伊藤
佐原 光春	酒井 登	NRC 一九七九年版 Nutrient Requirements of Swine の翻訳	伊藤	伊藤
田島 清	佐原 光春	飼料中のスレオニン量の相違がニワトリヒナ(幼雛)の血液、肝及び大腿筋のアミノ酸組成に及ぼす影響	伊藤	伊藤
今泉 節子	田島 清	環境温度の相違が仔豚のエネルギー代謝に及ぼす影響	伊藤	伊藤
今泉 節子	今泉 節子	反すう家畜を用いた消化試験予備期間の検討 副題 反すう家畜における給与飼料切換え後の順応状況	亀岡	亀岡
江口 征子	今泉 節子	キャッサバミールが鶏の成長及び消化に及ぼす影響	伊藤	伊藤
平岡 守	江口 征子	キャッサバミールが鶏の生産物、特に肉に及ぼす影響	伊藤	伊藤

収穫祭だより

第95回収穫祭を終えて

畜産学科三年 塚本 涉

本年度畜産学科統一本部統一委員長ならびに宣伝隊長を務めさせていただきました。今年の収穫祭は、もう最高!!まあ自分が三年でこの収穫祭が最後ということもあったと思います。三年間(収穫祭)を振り返ってみるといろいろな思い出があります。自分が一年の時、まだ畜友会という組織にも入っていませんでした。その当時の統一委員長は、現在繁殖におられる中山先輩でした。自分は、大学の学園祭つまり農大の収穫祭を体験するのは初めてでした。その当時自分は厚木から来ていました。はつきりいって無に等しいほどしか参加していませんでした。そのためか、家畜苑、北門、特企、体育祭と全てに協力をしていました。二年になり畜友会に入ると私が体育祭の委員長となつていざみんなを統一しようとしてもうまくいきませんでした。そしてこの時体育祭において二年連続最下位となつてしまいました。私はその時みんなの前では決して泣かなかった。なぜなら人数を集めきれずの敗退であつて、他学科にバカにされたく

なかつたからです。そして今年、今までの経験を基に全てに対して、厳しく指摘してきたつもりでした。そして自分は、宣伝隊長として収穫祭の皮切りしました。例年のない形で行われた、今回の宣伝隊長でした。というのも本隊と池袋に残る池袋隊の二つからできたのです。池袋隊に対しては、企画をねつたにすぎず本隊とともに行動を共にしていったのです。前日のことです。台風によって風は強く、雨がひどく中止となろうとしていました。我々は、準備を全て終え、あとは本番のみの万全な体勢でまっています。三時を回りもうだめか?!などといっていました。そして我々は「もうやけくそだ」といってトキワ松会館をパレードしていました。一時間ほどパレードのあとテレビを見ました。そうしたら台風が大幅にそれていったのです。我々は、あせつてねました。

全体的にも良いでした。特に体育祭では、二年連続の最下位だったので、良い成績をとってくれたことが一番うれしかったです。みなさんも我々とともに想い出をつくってみませんか。九十六回の収穫祭の参加を望んでいます。

前夜祭・特別企画

畜産学科二年 李 忠 憲

第九十五回収穫祭畜産学科統一本部副委員長、並びに、前夜祭・特別企画委員長という肩書きをもって一ヶ月あまり仕事をしてきた。一人で二つの仕事をしなければならなかった。統一本部での仕事・前夜特企での仕事。

本部での仕事は、あまりなく、ほとんどが前夜特企での仕事である。

前夜祭・特別企画と言えば、収穫祭のメインである。前夜祭から始まり、野外劇・ミスター・ミス・美人コンテスト・のど自慢大会などがあり、ステージの上で学科対抗の戦いをする。各学科とも、毎年趣向をこらして、どの企画をとっても、楽しいものを作ってくる。

前夜・特企は、一つのテレビ番組と言ってもおかしくはない。脚本、構成、演出、音楽照明、その他いろいろなものが、一体となって、役者も含めて、スタッフは客席に表現しなければならぬ。いくら身内が楽しんでも観客が見せたものが、面白くなければならぬ。去年、今年も野外劇で主役をやりながら、その難しさを今年も身をもって感じた。

どの企画をとっても、頭脳と体力をつかうのである。今年の結果は、去年よりもよくなるはなかったが、皆、一生懸命やった。この場をかりて、御協力していただいた皆様、ほんとうに御苦労様でした。

今、感じる事は、無事終つてよかつたということ!



体育祭を終えて

畜産学科三年 石和田 研 二

今年度、畜産学科統一本部体育祭委員長を務めさせて頂きました石和田です。

さて、今年度の体育祭はあいにくの雨天となり、グラウンドでの競技は中止となってしまい、とても残念に思っています。二年連続最下位というどうしようもない畜産学科の体育祭における現状を、何とか自分が委員長となったこの第九十五回大会で、脱出したかったからです。自分が委員長という大役に進んでなかったわけではありません。昨年度委員長だった塚本君に、今年は頼むよと言われ、正直言って面倒くさい役になったなと思いましたが、研究室へ帰り、その様な話をすると、先生をはじめ四年生の先輩達からも「そうか、頑張れよ!!」「大変だろうけど、しっかりやれよ!!」とはげましてもらいました。「よし、学生生活の思い出に頑張ってみるか」と思いました。

体育祭における畜産学科の成績が何故他の学科におとのか。その理由は、参加者の数に問題があると思いましたが。一昨年の体育祭では、開会式の参加人数が十五人、競技もだいたい同数でやりました。昨年とはいう

ん。気合いを入れなくては、と思った頃、外から雨の音が聞こえてきました。一番気にかかっていた天気が、とうとう最悪な天気となってしまったのです。外での競技は中止となりました。非常に残念でした。今年こそはという気持ちで取り組んで来た体育祭は、あっけなく、雨天の為に流されてしまったのです。

今年の体育祭は、賞状を二枚もらいました。もし雨が降らなければ、もっともらっていたかも知れません。今年が前年よりも良かったと思っただけは、参加者が多くなってくれた事です。四年生は卒業されても、他の三年生は残るのです。今年やる気のあった者はそのやる気や来年度の体育祭へ、又、やる気のなかった者も是非来年こそは、参加して体育祭を盛り上げて下さい。そして二年越しのビリ脱出を図ろうではないですか!!

と、ちょっとだけ多くなって、約三十名ぐらいでした。今年こそは自分の名前にかけても、ビリから脱出したかったです。その為には、まず人数を集める事。これしかないと思いましたが。二年生は神永君を中心として、人数集めに頑張ってくれました。二年生は彼らにまかせ、今年、初めて収穫祭、体育祭に参加する一年生は自分がやろうと思えました。幸い、自分の研究室は、一年生の化学実験を手伝っているのです。その時にいろいろと誘ってみました。百人ぐらいに聞いてみても「あつ、その日はバイトが。」とか「面倒くさいですよ。」と、誰も彼もその気になってくれませんでした。結局一年生では、十五名ぐらいが、参加してくれる様な事を言ってくれました。三年生は、自分の友達という事で、けっこうやってくれた様でしたし、四年生も、研究室の先輩達が協力してくれ、もしかししたら、今年こそいけるんじゃないかと、秘かに期待してました。

バックボードの設計や製作は、ほとんどが二年生中心にやってくれ、櫓を組み立てる時少し手伝ったぐらいでしたが、一応の事はやったかな、といった所でした。

いよいよ前日の夜となり、自分の気持ちは高まるばかりでした。相撲部の友達に泊めてもらいましたが、深夜になってもある学科は、櫓装飾を頑張っている様でした。次の日、つまり当日、自分は体がだるくて目が覚めました。熱をはかってみると、三十九度ちょっとありましたが。しかし委員長の自分は休むわけにはいきませ

THE KACHIKU—EN

畜産学科三年 折原 健太郎

秋……

晴れる日もある。曇の日もある。雨の日もある。時には台風も来たりする。しかし、雪は降らない。それは雪が降ればもう冬だから……

我が東京農業大学では、こんな秋の日に伝統の収穫祭が催される。その収穫祭の一角で毎年当然のごとく、家畜苑が作られてきた。そして、今年もまた当然のごとく家畜苑が作られることになった。

家畜苑製作。それは、一見、華かな感じがする。やはり、畜産学科のシンボル、いや収穫祭のシンボルともいえるべき家畜苑を作るのだから、それは、華やかなものではなくてはならないはずだ。しかし、その分、責任は重大である。

不安だ。動物の扱いに関しては、まったくのド素人、とてもみんなをまとめていけそうにないヤツ、そして、何よりも家畜苑なんてただおもしろ半分しか見たことがないから、過去どんなもんが作られたのか思い出せなかった。こんなヤツが、何となく委員長になってしまったのだから不安である。はたして、今年はやっとできるのだろうか。家畜苑製作メンバーにこんな不安があっ

た。だが、ひょうたんからコマ。というべきか、こんな不安が、メンバー一人一人に、「自分がやらねば」という責任感が芽生えはじめた。

家畜苑の製作期間は短い。家畜苑は、四号館前、つまり駐輪場に作るわけだから当然収穫祭直前にしか仕事に取り掛かれない。収穫祭前一週間。これにすべてを賭けなければならなかった。

外は寒いし、夜は眠い。でも、仕事は外だし、ほとんど夜になってしまふ。たまに雨が降ってみたりして……一週間は、短いようで長かった。失敗もあった。また、突然のひらめきでいいアイデアが浮ぶ事もあった。

十月三十日。動物たちがやってきた。牛、水牛、豚、ニワトリ、すべてやってきた。ここまでくればこっちのもの。やっと一息と思ったとたんに雨が降っていた。ニワトリは、四号館の中だからOK。豚も屋根の下にいるから大丈夫。でも、牛がびしょ濡れだ。屋根をせっかく作っただから屋根の下にいればいいのに……。でも、屋根の外に出る。「カゼをひかなければいいんだけど……」と心配した。そして、今日から動物たちが帰っていくまで、家畜苑初登場の監視塔に泊まり込み二十四時間体制での監視が始まった。

十一月一日。ついに収穫祭本番に突入した。待ちに待った収穫祭であるが、準備期間と比べてのんびりしていた。あの準備期間のあわただしさ、まるでウソのようだった。しかし、収穫祭が始まってしまうと、夜、酔っ

ばらいが出没するようになり、動物たちにちょっかいを出すヤツがいる。「そんなヤツが現れなければいいけど……」。そして無事に終わってくれ！」と祈る思いだった。

二日目は、無事に過ぎた。三日目は、NHKがやって来た。やっぱりテレビは、我が佩だった。来るっていうからせっかく掃除しといたのに、また掃除をされるフリをさせられたり、おまけにインタビュアーでは、「こんな事してさびしくないんですか？」なんて聞いてくる。で、こっちが「ムッ」としてもまたくり返して聞いてくるし……。「もう少し考えてしゃべれ！」と思った。そして、さらに追い打ちをかけるように、生放送で衛星放送なんて、これじゃあせっかくTVに出たのにビデオに撮っとけないじゃないかと、さらにムッとしてしまった。

決して、さびしくなんかありません。あのでき上った時のうれしかった事。あの製作時の苦勞(?)を知らないから、この充実感がわからないんだと思う。

無事、収穫祭は終わった。明日は、動物たちが帰って行く。なんとなくさみしく思う。でも早く寝なくちゃ。明日は早い。

収穫祭が終わって、動物たちが帰って行き、四号館の前もすっかりきれいになって、また。元の駐輪場に戻っていった。やっと終わった。無事で何より。これで来年もまた家畜苑はできる。「ホッ」と一息。

そして、農大にも、また冬がやって来る。だが、まだ

第95回収穫祭結果報告

前夜祭・特別企画

総合九位

前夜祭

野外劇

腕相撲大会

先生のご自慢

学生のご自慢

美人コンテスト

Mr.農大

Miss農大

人間アートコンテスト

五位(アート賞受賞)

優勝

十三位

七位・十九位・その他

欠場

六位

十位

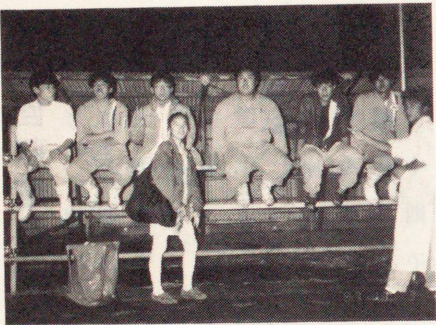
体育祭

総合 無し(雨天の為体育館となりました。)

集え!緑の開拓者 二位

やぐら装飾 三位

応援合戦 八位



収穫祭は終らなかった。予算の処理など、まだやる事がたくさんある。そして最後にトドメを刺したのがこの原稿。無い智恵しほり、辞書を引き引き、やっと今書き終わった。

最後になりましたが、顧問を引き受けて下さった近江先生。樋口農場はじめ、厚木中央農場の方々、山中農場はじめ、富士畜産農場の方々。そして協力して下さいました。各研究室の方々。本当にありがとうございます。また、来年も御迷惑をおかけすると思いますが、その時はどうぞよろしくお願ひ致します。また、家畜苑をいっしょに作った人たち、どうも御苦勞様でした。

第95回収穫祭参加者

宣伝隊

隊長 塚本 涉(三年)
副隊長 近藤 満之(二年)
會計 林 智子(三年)

都内宣伝パレード協力者

三年 栗原 雅彦
二年 神永 憲一
一年 柳 沢 光治
一年 田 中 則子
李 近藤 忠能
打 越 秀一
一 憲生

前夜祭・特別企画

委員長 李 忠憲(二年)
副委員長 深津 弘行(三年)
會計 中里 みき(一年)

参加協力者

四年 糸山 隆一 成瀬
三年 福崎 直美 谷田部 慶
加藤 智 塚本 渉
中家 いずみ 中 嶋 郁
長 沼 有俊 廣 瀬 輝 明

のど自慢大会

生方 弘子 秋葉 夕夏
小野 郁子 福岡 幹生
松田 賢成 畑岡 純人
岡崎 賢成 岡田 肇
志田 政憲

先生のど自慢大会

半沢 恵 先生(生理研)

美人コンテスト

打越 秀一

Mr. 農大

塚本 渉

Miss 農大

横川 麻紀子

野外劇

長沼 有俊 本多 加奈
廣瀬 輝明 近藤 満之
李 忠憲

二年

大場 淳子 古谷 圭子
本多 加奈 本多 圭子
守屋 敦夫 岡田 純人
岡崎 賢一 神谷 悦寛
神永 憲一 近藤 正生
近藤 満之 藤田 憲生
鳥山 雅隆 福岡 幹生
畑田 肇 志田 賢一
松葉 夕浩 打越 秀一
秋方 弘 小野 郁子
生方 夕浩 打越 秀一
山梨 由美 横川 麻紀子
吉兼 美史

一年

前夜祭
深津 弘行 中家 いずみ
塚本 渉 廣瀬 輝明
本多 忠憲 本多 忠憲
李 忠憲

特別企画

腕相撲大会
福崎 直美 加藤 智
鳥山 雅庸

人間アートコンテスト

塚本 渉

体育祭

委員長 石和田 研二 (三年)
副委員長 神永 憲一 (二年)
會計

製作者

大谷 道生 岡崎 賢成
岡田 純人 小川 希成
加藤 周吾 神谷 悦寛
近藤 満之 近藤 正生
志田 賢一 藤田 憲生
志田 憲一 芳賀 佳彦
永田 肇 堀田 亜里子
畑田 浩 水品 繁子
松田 雄一 森 繁子
宮腰 秀一
打越 秀一

つどえ緑の開拓者

神永 憲一 近藤 能生 岡田 純人
松田 浩 志田 政憲 小野 直樹
近藤 満之 小山 恭 小川 向希
打越 秀一

第95回収穫祭畜産学科統一本部決算報告書

	予	算	支	出	残	高
統一本部	120,000		149,536		△	29,536
前夜祭特別企画	100,000		23,792			76,208
体育祭	100,000		92,805			7,195
宣伝隊	50,000		41,000			9,000
北門	30,000		9,112			20,888
家畜苑	20,000		19,319			681
計	420,000		335,564			84,436

* 統一本部不足分は前夜祭・特別企画残金より補充。

尚、利息19円が加算されるので支出総額(335,564-19=335,545円)33,545円とする。

上記相違ないことを認めます。

第95回収穫祭畜産学科統一本部会計 深津弘行

昭和62年度会計監査委員

4年 平澤 進
 3年 石川 聖浩
 2年 堤 信一
 1年 金井 勉

北門装飾

製会副委員 委員
 作計員長 員長
 古本駒日 上勝梶長岩江
 川多崎下 内川 畑 沼下原
 加剛晋 智良有淳正
 浩奈一一幸子成俊一樹
 (三 (三 (三
 年) 年) 年)

家畜苑

製会副委員 委員
 作計員長 員長
 金細志駒田小小市相三田折
 井野賀崎中林林川原富中原
 忠剛章大憲光喜理勝健
 勉淳一一夫平平晴嗣和美太郎
 (一 (一 (一 (一 (一 (一 (一 (一
 年) 年) 年) 年) 年) 年) 年) 年)

その他協力者

三年 四年
 山森水星林 中遠田須座榊窪金内石浅田吉阿
 谷田島山 村山山下藤間原寺子山川水代見部
 行秀啓孝智牧 淳恵明洋行匡裕子剛純浩一義直充
 毅秋友男子子 淳恵明洋行匡裕子剛純浩一義直充
 弓八三町福長富千高柴坂小岸梅伊足田折山
 削木宅井澤田田代延橋田下松松原原藤立原笠内
 芳英康輝尚正宏俊英太一郎哲夫修嘉英紀和明慎徹
 子章治博三智志宏彦晃見太郎夫修嘉英紀和明慎徹
 吉山下森松福成中上高清水佐小草太今池林
 田俊ま本田田瀬村尾橋水藤松場田井田高本
 直樹也ゆ美枝エリサ 泰久 泉 博文 幸宏 雅彦 政和 潤 庸行 力 利行 孝司 宏之 真麗子

以上が収獲祭関係者です。御苦勞様でした。そして、研究室の皆さんには、多方面で御世話になりました。どうもありがとうございます。

畜友会だより

昭和63年度定期総会報告

昭和六十二年十二月二十二日、図書館四階視聴覚ホールにて昭和六十三年度畜友会定期総会が行われました。総会には、正会員74名が出席。特別会員の先生方も多数出席してくださいました。議長には畜産物利用学研究室の会田君（三年）が選出され、以下の議題が承認されましたので報告致します。

- 一、昭和六十二年度事業報告及び決算報告
- 二、昭和六十三年度行事計画及び予算案
- 三、畜友会規約改訂案について
- 四、畜友会役員選出

今年度の定期総会は例年になく充実した総会となりました。出席していただいた先生方をはじめ、会員のみなさんの御協力を感謝いたします。

昭和六十三年度の畜友会役員が総会により信任されましたので報告致します。

昭和63年度畜友会役員選挙報告

委員長	塚本 渉
副委員長	加藤 智
会 計	榎原 匡
渉 外	亀田 謙一
企 画	深津 弘行
	李 忠憲
	青塚 直
	町井 博
	神永 憲一
	石和田研二
	泉 昌史
	繁殖(四年)
	繁殖(四年)
	生理(四年)
	経営(四年)
	繁殖(四年)
	育種(三年)
	育種(四年)
	衛生(四年)
	繁殖(三年)
	飼養(四年)
	物利(四年)

今回の畜友会役員は、総会において信任投票を行いました。例年では有志によるものでしたが、今回を基に畜友会を改善を行いました。畜産学科の7研究室より選出することとなります。この役員でがんばってまいりますので、今後とも御支援と御協力のほどよろしく御願致します。

昭和六十三年度 畜友会役員

昭和62年度畜友会決算報告
(昭和62年11月30日現在)

収入の部	予 算	決 算	差引残高
前年度繰越金	353,208	353,208	0
新編転未利	1,360,000	1,192,000	△168,000
入 入 科	20,000	0	△ 20,000
納 会	24,000	6,000	△ 18,000
息	330,000	112,000	△218,000
		1,236	1,236
計	2,087,208	1,664,444	△422,764

支出の部	予 算	決 算	差引残高
卒業生送別会費	50,000	52,800	△ 2,800
卒業生記念品費	120,000	103,000	17,000
新入生歓迎会費	130,000	114,319	15,681
『ふじみの』第26号印刷費	400,000	400,030	△ 30
球技大会費	50,000	4,800	45,200
スポーツ大会費	100,000	105,619	△ 5,619
夏期実習農場紹介費	15,000	7,780	7,220
収穫祭説明会費	25,000	27,636	△ 2,636
収穫祭援助費	700,000	335,545	364,455
研修費	150,000	0	150,000
総務費	100,000	99,459	541
備品費	100,000	0	100,000
予備費	147,208	0	147,208
計	2,087,208	1,250,988	836,220

*卒業生送別会費、『ふじみの』26号印刷費、スポーツ大会費、収穫祭説明会費の不足額は予備費より補充する。

収入総額 支出総額 次期繰越金
(1,664,444) - (1,250,988) = (413,456)

上記相違ないことを認めます。

昭和62年度畜友会会計監査 4年 平澤 進 3年 石川 聖浩
2年 堤 信一 1年 金井 勉

昭和62年度畜友会事業報告

- 12月11日 昭和62年度畜友会定期総会
- 1月22日 4年生送別会
- 3月20日 卒業式、4年生記念品贈呈
- 4月6日 入学式
- 4月7日 学内オリエンテーションにて1年生へ畜友会の説明
- 4月13日 この日より2日間、新入生学外オリエンテーション参加
- 4月22日 新入生歓迎会
- 6月3日 この日より24日まで第17回学内スポーツ大会参加
- 6月23日 第17回学内スポーツ大会慰労会
- 7月1日 別海町実習紹介開始
- 7月5日 球技大会(ソフトボール)雨天中止
- 9月10日 厚木中央農場にて1年生に収穫祭説明
- 10月8日 第95回収穫祭畜産学科統一本部 本部開き
- 10月31日 この日より11月4日まで第95回収穫祭参加
- 11月12日 第95回収穫祭慰労会

学内スポーツ大会結果報告

第17回学内スポーツ大会結果

総合 七位

△団体の部▽

バレーボール

(男子)

二回戦敗退

バスケットボール

(男子)

準優勝

ソフトボール

(女子)

優勝

ハンドボール

(男子)

一回戦敗退

ミニサッカー

(女子)

一回戦敗退

ゲートボール

(男子)

一回戦敗退

相撲

(女子)

優勝

剣道

(男子)

決勝リーグ優勝

バドミントン

(男子)

ブロック三位

卓球

(男子)

一回戦敗退

軟式テニス

(男子)

一回戦敗退

△個人の部▽

卓球

(男子)

一回戦敗退

軟式テニス

(男子)

一回戦敗退

卓球

(男子)

一回戦敗退

卓球

(男子)

一回戦敗退

卓球

(男子)

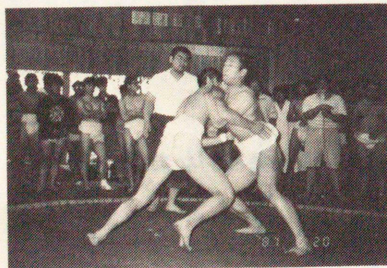
一回戦敗退

卓球

(男子)

一回戦敗退

第19回ソフトボールは、雨天中止となりました。



昭和63年度畜友会行事予定

1月中旬	4年生送別会
3月下旬	4年生卒業記念品贈呈
4月上旬	学内オリエンテーションにて1年生へ畜友会の説明
中旬	新入生学外オリエンテーション参加
下旬	新入生歓迎会
6月上旬	夏期農場実習紹介開始 第96回収穫祭畜産学科実行委員会発足 学内スポーツ大会参加
7月上旬	学内スポーツ大会慰労会 第28号ふじみの編集委員会発足
8月上旬	1年生夏期農場実習において収穫祭の説明
10月上旬	第96回収穫祭畜産学科統一本部本部開き
下旬	第96回収穫祭参加
12月上旬	昭和64年度畜友会定期総会
	その他(球技大会など)

上記が畜友会の今年の活動です。会員の方々の積極的な参加をおまちしています。

東京農業大学畜産学科 "畜友会"規約

第一章 総則

- 第一条 本会は東京農業大学畜友会と称す。
- 第二条 本会は東京農業大学在学学生、教職員、及び卒業生をもって、相互の親睦をはかり、本学の発展に寄与することを目的とする。
- 第三条 本会の事務所は、東京農業大学畜産学科本部におく。

第二章 会員

- 第四条 本会の会員は左記の三種をもって組織する。
- 一、正会員
 - 二、特別会員
 - 三、名誉会員
- 正会員は東京農業大学畜産学科在学学生、特別会員は東京農業大学畜産学科卒業生、並びに教職員。名誉会員は役員委嘱により承認を得たもの。
- 第五条 会員が本会の業務執行妨害あるいは名誉を失せる行為をした時は総会の議決により除名する。

第三章 役員及び機関

第六条 役員及び機関

- 第六条 本会は左記の役員をおく。
- 一、委員長一名、副委員長二名、書記二名、会計一名、会計補佐一名、渉外二名、企画三名、庶務二名
 - 二、一年クラス委員四名、二年クラス委員四名、研究室委員八名
 - 三、監査員四名
- 本会は顧問をおき、畜産学科長ならびに畜産学科主事が此の任にあたる。
- 一、委員長、副委員長、書記、会計、渉外、企画、庶務は選挙によって、計十四名選出する。なお選挙規約は別に定める。
- 二、第六条第二項、第三項に定められた役員は、一、二年二名、各研究室一名ずつ、監査委員は各学年一名ずつ選出する。
- (なお、専攻生は、各研究室員の中に含まれる。)
- 三、欠員が生じた場合は、速やかに補充しなければならぬ。
- 役員任期は原則として一年とする。
- 総会は正会員より構成され、本会の最高決議機関とする。
- 第十一条 一、総会は正会員の三分の一以上より成立する。

二、委任状は署名捺印（拇印を含む）を必要とし、議長に一任する。

三、委任状は総会に際し定足数に含まれる。但し、委任状は議長委任とし、正会員総数の四分の一までとする。

四、委任状の検査は役員が行なう。

五、本条文は昭和四十三年十二月十八日をもって追加し即日効力を発する。

第十二条

定期総会は年一回十二月に召集する。

臨時総会は左記に該当した場合一ヶ月以内に召集しなければならない。

一、正会員の四分の一以上の同意を得て、開催目的及び召集理由を記載し委員長に提出あるとき。

第十三条

二、役員の上二分の一以上が必要と認められたとき、総会の開催は五日前に公示しなければならない。

第十四条

総会における議長は、総会においてその都度互選する。必要に応じて議長は副議長を指名する。

第十五条

総会の議決は、出席者の過半数によって議決され、可否同数のときは、議長の決するところによる。

第十六条

総会の過半数により、役員の不信任を可決できる。

第四章 業務

第十七条

第六条第一項、第二項に定められた役員は本会の最高執行機関たる委員会を構成し、此の召集を委員長が行なう。

第十八条

本会の事業年度及び会計年度は十二月一日より翌年十一月末日までとする。

第十九条

本会は左記の業務を行なう。

一、会員親睦会

二、講習会及び研究発表会

三、見学調査

四、機関紙の発行

五、その他第二条に附帯する業務

第五章 会 計

第二十条

会費は年間二〇〇〇円とする。その納入は四年分一括し、入学時に納入のこと。

第二十一条

本会の運営は会員の納入する会費で運営する。但し第十九条の業務執行にあたり臨時徴収する場合もある。寄附行為は認める。

第二十二条

納入金の払い戻しは行なわない。

第二十三条

但し入学取消しの場合はその限りではない。決算報告は十一月末日までに作成し公示する。承認は定期総会において行なう。

畜友会選挙規定

第六章 監 査

第二十四条

本会の業務を円滑、正常化する為監査委員をおく。

第二十五条

監査委員は、前条の目的達成の為、年度末に会計監査を行なう。

監査は監査委員が必要と認めれば随時できる。

第二十六条

監査委員は第六条第一項、第二項の役員の兼任は出来ない。

第七章 附 則

第二十七条

本規定解釈の疑義は、委員会において、最終的解釈する。

第二十八条

本規定の改正、及び追加は総会においておこなう。

第二十九条

本規定は昭和三十五年六月二十九日より施行する。

第一章 総 則

第一条

この規定は、畜友会役員選挙に関し、選挙が公明、且つ円滑に行なわれることを目的とする。

第二条

この規定は、畜友会規定第六条第一項に基づく役員選挙に適用される。

第二章 選挙管理委員会

第三条

第一条の目的を達するために、東京農業大学畜友会選挙管理委員会を設置する。（以下本会又は単に選挙管理委員会と呼ぶ。）

第四条

本会は、畜友会役員選挙に関して全ての権限を有する。

第五条

本会の委員は、各学年より一名ずつ選出し、委員長はその中より互選する。ただし、これに畜友会役員、及び被選挙人は兼任できない。

ただし、各学年の在籍数の過半数によって選挙は成立し、三分の二以上の挙手二名以上の場合は挙手をもって最高点を当選とする。

第六条

本会の委員の任期は原則として、畜友会の事業年度に準ずるものとする。

第七条

本会は選挙が公明且つ適正に行なわれるように常にあらゆる機会を通じて、公示及び選挙期日、方法、その他必要と認める事項を畜友会会員に周知させなければならぬ。畜友会規定第十六条によつて、畜友会役員の不信任を審査し、成立した場合には、本会は新たに役員を選挙を行なう。

第八条

本会は選挙が公明且つ適正に行なわれるように常にあらゆる機会を通じて、公示及び選挙期日、方法、その他必要と認める事項を畜友会会員に周知させなければならぬ。畜友会規定第十六条によつて、畜友会役員の不信任を審査し、成立した場合には、本会は新たに役員を選挙を行なう。

第三章 選挙

第九条

選挙はクラス、研究室の移動投票により行なう。

第十条

一、投票期日並びその期間は事業年度終了日以前の日時を原則とし、選挙管理委員会がこれを定める。
なお、不測の事態が生じた場合は、選挙管理委員会の決するところによる。

二、畜友会役員の不信任が成立した場合には、二週間以内に選挙を行なう。

第十一条

選挙管理委員会は投票日の十日前に公示しなければならない。

第十二条

選挙人、及び被選挙人は、畜友会正会員とする。

第十三条

選挙は立候補制とし推薦者一名を必要とする。

第十四条

選挙管理委員会は立候補者に対して選挙宣伝の為、適切な援助を与えるものとする。

第十五条

投票に関しては左記の規定に基づいて行なう。
(イ) 投票は同一投票用紙において役員十四名については無記名で投票する。

(ロ) 投票は選挙管理委員会の定める用紙により行なう。

(ハ) 代理投票及び不在者投票は認めない。

(ニ) 投票箱は厳重に封鎖されたものを用い、投票終了後は封印され、開票時まで開くことはない。

(ホ) 投票場は選挙管理委員会が定める。開票は全投票終了後、ただちに行なう。

開票は選挙管理委員会の定める場所において、立候補者またはその代理人の立合いのもとで行なう。

第十八条

左記の投票は無効とする。

(イ) 正規の投票用紙を用いていないもの。

(ロ) 立候補者以外の氏名を記入しているもの。

(ハ) 選挙管理委員会が不明と認めたもの。

畜友会正会員の二分の一をもって最低投票数とし、これに満たないとき、選挙は無効とする。

第十九条

畜友会正会員の二分の一をもって最低投票数とし、これに満たないとき、選挙は無効とする。

第二十条

当選は有効投票数の上位の委員定数までの者とする。

第二十一条

立候補者が定数のときは信任投票を行ない有効投票数の過半数をもって当選とする。

第二十二條

選挙管理委員会は開票後二日以内に適当な方法をもって、当選者を公表しなければならない。

第二十三條

選挙管理委員会は選挙記録を作成し、一年以上保管する。

第二十四條

選挙管理委員会は畜友会会員に選挙記録の提示を求められた時には、いかなる事情があつてもこれに応じなければならない。

第四章 予算及び監査

第二十五條

畜友会は選挙管理委員会の必要とする経費を支出しなければならない。

第二十六條

選挙管理委員会は年度末に畜友会会計監査委員の監査をうける。

第五章 改正

第二十七條

本規定は畜友会総会において三分の二以上の賛成をもって成立する。

第二十八條

本規定に疑義が生じた時は、選挙管理委員会が最終的に解釈する。

第二十九條

本規定は昭和五十年四月一日より施行する。

編集部では「ふじみの」第二十八号の原稿を募集致しております。より一層充実したものとす為にも、名誉会員、特別会員、学生多数の御協力をお願いいたします。

記

募集期間 六十三年六月〜六十四年一月下旬

要項 論文、随筆、紀行文、主張
四〇〇字詰、十枚以内

写真カット、は随意
表紙図案、三色以内

宛名 東京都世田谷区桜丘一―一―
東京農業大学畜産学科内

畜友会

ふじみの編集委員会行

発行日 昭和六十四年四月予定

応募原稿は一切お返し致しません。

畜友会「ふじみの」

編集委員会

〒(四二〇)二二二二(呼)

編集後記

毎年少人数の編集委員でつくりつづけてきたこのふじみの28号をむかえるにあたりました。28年間という歴史は、決して一言ではいい表わせないものだと思います。28年目の歴史を私たちがつくったという充実感を今年の編集委員の誰もがもっています。

これからの29年、30年目の歴史を記し、このふじみをささえてくれることを後輩達に期待して、編集後記とさせていただきます。

最後になりましたが、この場をおかりしまして、忙しい中原稿を頂きました先生方、会員の方々に厚く御礼申し上げます。

編集委員一同

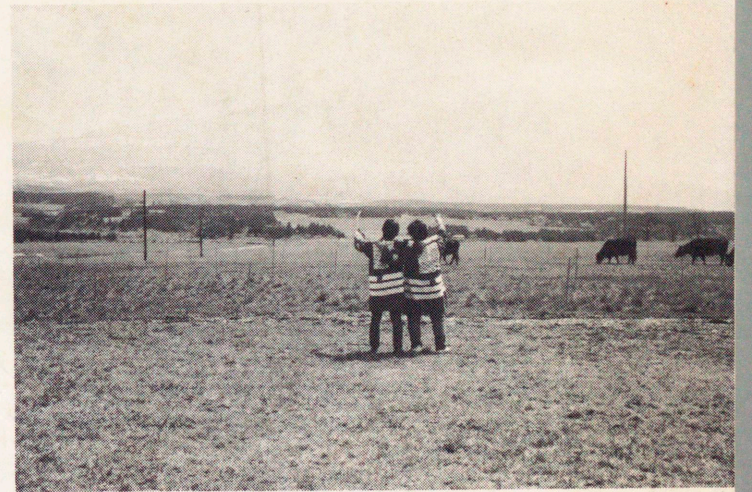
昭和63年3月1日発行

“ふじみの”第27号

編集責任者 渡辺誠喜
編集長 塚本渉
発行者 畜友会

発行所 東京都世田谷区桜丘1-1-1
東京農業大学畜友会
電話 (420) 2131 (呼)

印刷所 世田谷区経堂1-6-13
エルデ・タイプ社
電話 (429) 1067



1988